

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第177集

本 庄 市

今井川越田遺跡

本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告 I

1 9 9 5

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第42号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物

序

関越自動車道の開通は、首都圏との大動脈として、埼玉県北地域の生活や産業の活性化を進める大きな要因となりました。

本庄児玉インターチェンジの近傍には、すでに児玉工業団地が設置され、その輸送の便を十分に活用しているところであります。

このたび、同地域の工業化のさらなる発展と調和のとれた開発をめざして、本庄今井工業団地の造成が実施されることになりました。

児玉郡の中心である本庄市は、近世以降中山道の宿場町として、また藪や生糸の集散地として発展を遂げてきました。

同時に多くの埋蔵文化財が包蔵されていることでも広く知られており、早くから研究が積み重ねられてきた地であります。このことは、本市を中心とした地域が、古くから栄えていたことの証といえましょう。

本庄今井工業団地造成地内には、5カ所の埋蔵文化財包蔵地が所在しましたが、その取り扱いについては関係諸機関で協議が重ねられた結果、当事業団が事前に記録保存のための発掘調査を実施することになったものです。

今井川越田遺跡は、これらの遺跡のひとつで、調査

の結果、300軒を越える竪穴住居跡を検出し、古墳時代後期を中心とする大規模な集落跡の存在が明らかになり、多大な成果を収めることができました。

今回報告するのは、平成5年度に調査が終了した集落跡部分のうち竪穴住居跡119軒と掘立柱建物跡、土壌等であります。残りの遺構については順次報告される予定であります。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行に当り、発掘調査から報告書の作成に至るまで、多大な御指導・御協力を賜りました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県企業局土地開発第2課、同北部土地開発事務所工事1課、本庄市教育委員会並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字今井字川越田54番地1他に所在する今井川越田遺跡の発掘調査報告書の第1分冊である。
文化庁指示通知は平成5年9月2日付委保第5の935号及び平成5年9月3日付委保第5の952号である。
2. 発掘調査は、今井工業団地造成事業に伴う事前調査である。埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県企業局の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 今井川越田遺跡の発掘調査は、平成5年4月1日から平成7年3月31日まで実施した。整理事業は平成6年4月1日から平成7年3月31日まで実施した。発掘調査及び整理事業の組織は2ページに示した。
第1分冊は、平成5年度に調査した範囲のうち、溝跡を除く部分である。これ以降の調査分は、今後刊行する予定である。
5. 本書の執筆及び編集は資料部資料整理第1課の磯崎 一が行ない、富田和夫、赤熊浩一、岩瀬 謙ほかの協力があつた。第1章を文化財保護課、鉄製品の実測と記載は瀧瀬芳之が分担した。
6. 図版作成、写真撮影は下記のものが行つた。
図版作成及び遺物撮影 磯崎
発掘調査における写真撮影 磯崎・石坂俊郎・山本 靖・伴瀬宗一・岩田明広・渡辺清志
7. 土器胎土分析及び口絵カラー写真撮影については下記へ委託した。
土器胎土分析 第四紀地質研究所
口絵カラー写真撮影 小川忠博
8. 本書に掲載した資料は平成7年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
9. 本書の作成に際し、下記の方々から御教示・御協力を賜つた。(敬称略)
長谷川勇 増田一裕 太田博之 恋河内昭彦 鈴木 徳雄 渡辺 一 笹森健一

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第Ⅱ区系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは大グリッド(100×100m方眼)中に小グリッド(5×5m方眼)を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SJ…住居跡 SK…土壇 SD…溝 SB…掘立柱建物跡
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺構全図1/500 住居跡・土壇1/60 カマド1/30 掘立柱建物跡1/80
5. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものにはスケールで示した。
土器1/4 土器拓影図1/4 石器1/4 土製品1/2 鉄器1/3
6. 遺物観察表の計測値は、()内は推定値、単位はcmである。
7. 遺物観察表の色調は新版標準土色帳に準じて細別

したが、厳密ではなく概ねである。

- A…10R 赤、暗赤 B…2.5YR 橙、明赤褐、赤褐と5YR 赤褐 C…7.5YR 黄橙、橙と10YR 黄橙 D…2.5Y 黄 E…2.5Yと5Y 淡黄、浅黄 F…5YRと7.5YR 黒褐色、黒 G…5BGと10BG 明青灰、青灰 H…N 灰白、灰 I…7.5Y 灰白、灰 J…5Y 灰白、灰 J…5Pと5RP 明紫灰、紫灰
8. 遺物観察表の胎土は、概ね最も多量に含まれる含有物とその粒度の組み合わせで表記した。含有物の種類は次のとおりである
A…赤色粒状 B…白色乃至無色板状 C…黒色板状 D…白色粒状 E…片岩 F…黒色粒状 G…金色板状 H…白色針状
含有物の粒度は直径2mmを粗とし、2mm以下を細、2mm以上を礫とする。組み合わせは次のとおりである。
1…細 2…細+粗 3…粗 4…粗+礫
5…細+粗+礫
 9. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。
A…良好 B…不良

目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
目次	
I. 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
II. 遺跡の立地と環境	3
III. 遺跡の概要	7
IV. 古墳時代の遺構と遺物	11
1. 第1住居跡群	14
2. 第2住居跡群	23
3. 第3住居跡群	38
4. 第4住居跡群	57
5. 第5住居跡群	88
6. 第6住居跡群	108
7. 第7住居跡群	143
8. 第8住居跡群	198
9. 第9住居跡群	230
10. 掘立柱建物跡	238
11. ビット群	239
12. 土壌	239
V. 平安時代以降の遺構と遺物	241
1. 住居跡	242
2. 掘立柱建物跡	250
3. ビット群	252
4. 土壌・堀跡	252
5. グリッド・表採遺物	253
VI. まとめ	258
付編	261

挿図目次

第 1 図	埼玉県の地形	3	第 36 図	第19号住居跡	46
第 2 図	周辺遺跡分布図	4	第 37 図	第19・20・52・53号住居跡	47
第 3 図	今井川越田遺跡全測図 (1/1,500)	5	第 38 図	第19号住居跡出土遺物(1)	48
第 4 図	遺跡周辺の地形	8	第 39 図	第19号住居跡出土遺物(2)	49
第 5 図	今井川越田遺跡全測図 (1/600)	10・11	第 40 図	第52号住居跡出土遺物	51
第 6 図	住居跡群分割図	12	第 41 図	第29号住居跡(1)	52
第 7 図	第1・第2住居跡群	14	第 42 図	第29号住居跡(2)	53
第 8 図	第1号住居跡	15	第 43 図	第29号住居跡出土遺物(1)	54
第 9 図	第1号住居跡出土遺物	16	第 44 図	第29号住居跡出土遺物(2)	55
第 10 図	第1・9・10号住居跡	17	第 45 図	第51号住居跡	56
第 11 図	第4号住居跡	18	第 46 図	第51号住居跡出土遺物	57
第 12 図	第4号住居跡出土遺物(1)	19	第 47 図	第38号住居跡出土遺物	57
第 13 図	第4号住居跡出土遺物(2)	20	第 48 図	第17号住居跡(1)	58
第 14 図	第4号住居跡出土遺物(3)	21	第 49 図	第17号住居跡(2)・第22号住居跡	59
第 15 図	第5号住居跡(1)	23	第 50 図	第22号住居跡出土遺物	59
第 16 図	第5号住居跡(2)	24	第 51 図	第17号住居跡出土遺物(1)	60
第 17 図	第5号住居跡出土遺物(1)	25	第 52 図	第17号住居跡出土遺物(2)	61
第 18 図	第5号住居跡出土遺物(2)	26	第 53 図	第23号住居跡・出土遺物	63
第 19 図	第8号住居跡・出土遺物	28	第 54 図	第24号住居跡(1)	64
第 20 図	第13号住居跡出土遺物	29	第 55 図	第24号住居跡(2)	65
第 21 図	第13号住居跡(1)	30	第 56 図	第24号住居跡出土遺物	66
第 22 図	第13号住居跡(2)	31	第 57 図	第25・27号住居跡	68
第 23 図	第14号住居跡・出土遺物	32	第 58 図	第25号住居跡出土遺物	69
第 24 図	第15号住居跡	33	第 59 図	第27号住居跡出土遺物	70
第 25 図	第15号住居跡出土遺物	34	第 60 図	第26号住居跡	71
第 26 図	第15・21・39・63号住居跡	35	第 61 図	第26号住居跡出土遺物(1)	72
第 27 図	第16号住居跡出土遺物	36	第 62 図	第26号住居跡出土遺物(2)	73
第 28 図	第16号住居跡	37	第 63 図	第28号住居跡(1)	75
第 29 図	第30号住居跡出土遺物	38	第 64 図	第28・65号住居跡	76
第 30 図	第3・4住居跡群	38	第 65 図	第28号住居跡出土遺物	77
第 31 図	第6号住居跡(1)	40	第 66 図	第35号住居跡・出土遺物	78
第 32 図	第6号住居跡(2)・第12号住居跡(1)	41	第 67 図	第40号住居跡(1)	79
第 33 図	第6号住居跡出土遺物	42	第 68 図	第30号住居跡・40号住居跡(2)	80
第 34 図	第12号住居跡(2)	44	第 69 図	第40号住居跡出土遺物	80
第 35 図	第12号住居跡出土遺物	45	第 70 図	第43号住居跡(1)	81

第 71 图	第 43 号住居跡(2)·第 64 号住居跡	82	第 108 图	第 50 号住居跡出土遺物(2)	120
第 72 图	第 43 号住居跡出土遺物	83	第 109 图	第 55 号住居跡	122
第 73 图	第 45 号住居跡·46 号住居跡(1)	84	第 110 图	第 55 号住居跡出土遺物	123
第 74 图	第 45 号住居跡出土遺物	85	第 111 图	第 56 号住居跡(1)	124
第 75 图	第 46 号住居跡(2)	86	第 112 图	第 56 号住居跡(2)	125
第 76 图	第 46 号住居跡出土遺物	87	第 113 图	第 56 号住居跡出土遺物	126
第 77 图	第 158·159 号住居跡	88	第 114 图	第 57 号住居跡	128
第 78 图	第 5 住居跡群	88	第 115 图	第 57 号住居跡出土遺物	129
第 79 图	第 31 号住居跡(1)	89	第 116 图	第 58 号住居跡(1)	131
第 80 图	第 31 号住居跡(2)·第 32 号住居跡	90	第 117 图	第 58 号住居跡(2)·出土遺物	132
第 81 图	第 32 号住居跡出土遺物	91	第 118 图	第 59 号住居跡(1)	134
第 82 图	第 33 号住居跡	92	第 119 图	第 59 号住居跡(2)	135
第 83 图	第 33 号住居跡出土遺物	93	第 120 图	第 59 号住居跡出土遺物(1)	136
第 84 图	第 34 号住居跡	94	第 121 图	第 59 号住居跡出土遺物(2)	137
第 85 图	第 34 号住居跡出土遺物	95	第 122 图	第 66 号住居跡(1)	138
第 86 图	第 36 号住居跡	96	第 123 图	第 66 号住居跡(2)	139
第 87 图	第 36 号住居跡出土遺物	97	第 124 图	第 66 号住居跡出土遺物(1)	139
第 88 图	第 37 号住居跡	98	第 125 图	第 66 号住居跡出土遺物(2)	140
第 89 图	第 37 号住居跡出土遺物	98	第 126 图	第 69 号住居跡	142
第 90 图	第 41 号住居跡·出土遺物	100	第 127 图	第 7 住居跡群	143
第 91 图	第 42 号住居跡(1)	101	第 128 图	第 60·61 号住居跡	144
第 92 图	第 42 号住居跡(2)	102	第 129 图	第 60·61 号住居跡出土遺物	145
第 93 图	第 42 号住居跡出土遺物(1)	103	第 130 图	第 62 号住居跡(1)	146
第 94 图	第 42 号住居跡出土遺物(2)	104	第 131 图	第 62 号住居跡(2)	147
第 95 图	第 42 号住居跡出土遺物(3)	105	第 132 图	第 62 号住居跡出土遺物	148
第 96 图	第 44 号住居跡·出土遺物	107	第 133 图	第 67·75 号住居跡	150
第 97 图	第 6 住居跡群	108	第 134 图	第 67 号住居跡出土遺物	151
第 98 图	第 47 号住居跡(1)	109	第 135 图	第 68 号住居跡·出土遺物	152
第 99 图	第 47 号住居跡(2)·第 49·54 号住居跡	110	第 136 图	第 76 号住居跡出土遺物	153
第 100 图	第 47 号住居跡出土遺物	111	第 137 图	第 76 号住居跡	154
第 101 图	第 48 号住居跡	113	第 138 图	第 84 号住居跡·出土遺物	155
第 102 图	第 48 号住居跡出土遺物	114	第 139 图	第 85 号住居跡	157
第 103 图	第 49 号住居跡	115	第 140 图	第 85 号住居跡出土遺物(1)	158
第 104 图	第 49 号住居跡出土遺物	116	第 141 图	第 85 号住居跡出土遺物(2)	159
第 105 图	第 50 号住居跡(1)	117	第 142 图	第 86 号住居跡·出土遺物	160
第 106 图	第 50 号住居跡(2)	118	第 143 图	第 85 号住居跡·第 86 号住居跡(2)	161
第 107 图	第 50 号住居跡出土遺物(1)	119	第 144 图	第 87 号住居跡	163

第145図	第87号住居跡出土遺物(1) ……………	164	……………	206	
第146図	第87号住居跡出土遺物(2) ……………	165	第180図	第74号住居跡出土遺物(1) ……………	207
第147図	第88号住居跡(1) ……………	167	第181図	第74号住居跡出土遺物(2) ……………	208
第148図	第88号住居跡2、第89・153号住居跡 ……………	168	第182図	第167号住居跡(2)・出土遺物 ……………	210
第149図	第88号住居跡出土遺物(1) ……………	169	第183図	第178号住居跡出土遺物 ……………	211
第150図	第88号住居跡出土遺物(2) ……………	170	第184図	第78号住居跡・出土遺物 ……………	212
第151図	第89号住居跡出土遺物 ……………	171	第185図	第80号住居跡(1) ……………	213
第152図	第90・154号住居跡 ……………	173	第186図	第80号住居跡(2)、第81号住居跡 ……………	214
第153図	第90・100・154号住居跡 ……………	174	第187図	第80号住居跡出土遺物 ……………	215
第154図	第90号住居跡出土遺物 ……………	175	第188図	第81号住居跡出土遺物 ……………	217
第155図	第154号住居跡出土遺物 ……………	176	第189図	第82・162・163号住居跡 ……………	219
第156図	第91・99号住居跡 ……………	177	第190図	第82号住居跡出土遺物 ……………	220
第157図	第91号住居跡(2)、第95・152号住居跡(1) ……………	178	第191図	第160号住居跡 ……………	221
第158図	第91号住居跡出土遺物 ……………	179	第192図	第160号住居跡出土遺物 ……………	222
第159図	第95・152号住居跡(2) ……………	181	第193図	第164・165号住居跡 ……………	224
第160図	第152号住居跡出土遺物 ……………	182	第194図	第165号住居跡出土遺物 ……………	225
第161図	第93・94号住居跡 ……………	183	第195図	第168・172号住居跡 ……………	227
第162図	第93号住居跡出土遺物 ……………	184	第196図	第168号住居跡出土遺物 ……………	228
第163図	第96号住居跡・出土遺物 ……………	186	第197図	第172号住居跡出土遺物 ……………	229
第164図	第97号住居跡(1) ……………	188	第198図	第9住居跡群 ……………	230
第165図	第97号住居跡(2)、第98号住居跡(1) ……………	189	第199図	第156号住居跡(1)・出土遺物 ……………	231
第166図	第97号住居跡出土遺物 ……………	190	第200図	第156号住居跡(2)、第157・170号住居 跡(1) ……………	232
第167図	第98号住居跡(2) ……………	192	第201図	第170号住居跡(2)・出土遺物 ……………	233
第168図	第98号住居跡出土遺物(1) ……………	193	第202図	第171号住居跡(1) ……………	234
第169図	第98号住居跡出土遺物(2) ……………	194	第203図	第171号住居跡(2)、第173号住居跡 ……………	235
第170図	第100・151号住居跡 ……………	195	第204図	第171・173号住居跡出土遺物 ……………	236
第171図	第100号住居跡出土遺物 ……………	196	第205図	住居跡出土鉄製品 ……………	237
第172図	第8住居跡群 ……………	198	第206図	第1号掘立柱建物跡 ……………	238
第173図	第71・77号住居跡(1) ……………	199	第207図	第1ピット群 ……………	239
第174図	第71・77号住居跡(2)、第72号住居跡 ……………	200	第208図	第1号土壇出土遺物 ……………	240
第175図	第71号住居跡出土遺物 ……………	201	第209図	平安時代以降の遺構分布図 ……………	241
第176図	第72号住居跡出土遺物(1) ……………	202	第210図	第2号住居跡・出土遺物 ……………	242
第177図	第72号住居跡出土遺物(2) ……………	203	第211図	第3号住居跡 ……………	243
第178図	第74号住居跡(1) ……………	205	第212図	第3号住居跡出土遺物 ……………	243
第179図	第74号住居跡(2)、第167・168号住居跡 ……………	206	第213図	第7号住居跡 ……………	244
			第214図	第7号住居跡出土遺物 ……………	245

第215図	第11号住居跡	246
第216図	第11号住居跡出土遺物	246
第217図	第18号住居跡	247
第218図	第155号住居跡・出土遺物	248
第219図	第169号住居跡・出土遺物	249
第220図	第2号掘立柱建物跡	250

第221図	第3号掘立柱建物跡	251
第222図	第2ビット群(1)	252
第223図	第2ビット群(2)	252
第224図	第3号土壇・第1号塚跡	253
第225図	グリッド・表探遺物(1)	254
第226図	グリッド・表探遺物(2)	255

図版目次

図版1	第1号住居跡	第17・23号住居跡
	第2号住居跡	第28号住居跡
	第3号住居跡	図版11
図版2	第4号住居跡	第28号住居跡遺物出土状態
	第5号住居跡	第19・29号住居跡
	第5号住居跡遺物出土状態	第29号住居跡
図版3	第5号住居跡カマド	図版12
	第6号住居跡	第33号住居跡
	第6号住居跡カマド	第34号住居跡
図版4	第7号住居跡	第36号住居跡
	第1・9・10号住居跡	図版13
	第11号住居跡	第36号住居跡カマド
図版5	第12・51号住居跡	第40号住居跡
	第13号住居跡	第41号住居跡遺物出土状態
	第14号住居跡	図版14
図版6	第15号住居跡	第42号住居跡遺物出土状態
	第15号住居跡カマド	第42号住居跡カマド
	第16号住居跡	第43号住居跡
図版7	第17号住居跡	図版15
	第17号住居跡カマド	第46号住居跡
	第17号住居跡遺物出土状態	第47・50号住居跡
図版8	第18号住居跡	第47号住居跡
	第19号住居跡	図版16
	第19号住居跡カマド・貯蔵穴	第47号住居跡カマド
図版9	第21号住居跡	第48号住居跡カマド
	第22号住居跡	第50号住居跡カマド
	第24号住居跡	図版17
図版10	第25号住居跡	第55号住居跡
		第55・56号住居跡
		第56号住居跡カマド
		図版18
		第55・56・57号住居跡
		第58号住居跡
		第59号住居跡
		図版19
		第62号住居跡周辺
		第66号住居跡

- 第67号住居跡
- 図版20 第68号住居跡
第71・77号住居跡
第71号住居跡カマド
- 図版21 第72号住居跡
第74号住居跡
第74号住居跡カマド
- 図版22 第74・167・178号住居跡
第76号住居跡
第80号住居跡カマド
- 図版23 第82号住居跡
第84・85号住居跡
第85号住居跡
- 図版24 第85号住居跡遺物出土状態
第85号住居跡カマド
第87号住居跡
- 図版25 第87号住居跡カマド
第88号住居跡
第88号住居跡カマド
- 図版26 第90・154号住居跡
第91・95号住居跡
第93号住居跡
- 図版27 第93号住居跡カマド
第97・98号住居跡
第98号住居跡カマド
- 図版28 第100号住居跡
第100号住居跡カマド
第152号住居跡
- 図版29 第152号住居跡カマド
第155号住居跡
第160号住居跡
- 図版30 第165号住居跡
第165号住居跡カマド
第167号住居跡貯蔵穴
- 図版31 第169号住居跡
第170号住居跡
第170号住居跡カマド
- 図版32 第171・173号住居跡
第171号住居跡カマド
第1号ピット群
- 図版33 須恵器環・蓋
(第4・5・7・19・85・88・98号住居跡)
- 図版34 土師器環
(第4・5・12号住居跡)
- 図版35 土師器環
(第15・17・19・24・26・28・29号住居跡)
- 図版36 土師器環
(第32・33・34・36・42号住居跡)
- 図版37 土師器環
(第42・44・47・49号住居跡)
- 図版38 土師器環
(第50・57・59・62号住居跡)
- 図版39 土師器環
(第66・72・74号住居跡)
- 図版40 土師器環
(第74・81・82・85号住居跡)
- 図版41 土師器環
(第87号住居跡)
- 図版42 土師器環
(第87・88号住居跡)
- 図版43 土師器環
(第88・89・90・91・93・97号住居跡)
- 図版44 土師器環
(第98・100・152・160・165号住居跡)
- 図版45 土師器環
(第167・168・171・173号住居跡、第1号土
墳)
- 図版46 土師器皿・鉢・椀
(第5・17・24・42・49・171・173号住居跡)
- 図版47 土師器椀・鉢
(第62・71・78・85・91・97号住居跡)
- 図版48 土師器椀・鉢・小型壺・高環
(第4・17・42・81・152・165・167・171・
173号住居跡)

- 図版49 土師器高坏・甕・台付甕
(第1・4・32・42・66・165号住居跡)
- 図版50 土師器小型甕
(第29・72・80・85号住居跡)
- 図版51 土師器壺・甕
(第42・50・80・85号住居跡)
- 図版52 土師器甕
(第19・66・93・154号住居跡)
- 図版53 土師器甕
(第4・5号住居跡)
- 図版54 土師器甕
(第5・6・13号住居跡)
- 図版55 土師器甕
(第13・17・24号住居跡)

- 図版56 土師器甕
(第26・29号住居跡)
- 図版57 土師器甕
(第42号住居跡)
- 図版58 土師器甕
(第42・80号住居跡)
- 図版59 土師器甕
(第85・91・152号住居跡)
- 図版60 土師器甕
(第48・50・60・61・100号住居跡)
- 図版61 支脚・ミニチュア土器・砥石
- 図版62 土鎌
- 図版63 土鎌・石製品・土製品

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92(くに)づくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

工業の振興では、都心からおおむね50km以上の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノグリーン構想を推進している。

本市今井・西富田地区及び児玉町高関地区にわたる本庄今井工業団地はこの構想に基づき計画された事業である。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、この開発事業と文化財の保護について関係部局と事前協議を重ね調整を図ってきたところである。

平成2年7月31日に開催した協議で、本市教育委員会が事業予定地内の埋蔵文化財試掘調査実施することを確認した。

その後、用地買収等が進展、終了した平成4年11月13日に試掘調査の方法・日程等を協議し、平成5年1月6日から3月12日にわたり、試掘調査が実施された。

調査の結果、以下の埋蔵文化財包蔵地が確認された。条里跡は現水田面の畦畔・水路に広範囲に反映されているが、調査では、現畦畔と走向が異なる旧畦畔・

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

今井川越田遺跡の調査は平成5年4月から開始され平成6年度は調査継続中であるが、平成7年度で調査が終了する予定である。

調査対象総面積は、約400,000㎡に及び、調査範囲内には、今井川越田遺跡、今井条里遺跡、北廓遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡等が存在する。

調査実施計画の概要は以下に記す通りである。

平成5年度は、工業団地用地の南側を東西に貫流す

溝などが確認された他、事業地の南部で新たに大規模な集落跡(今井川越田遺跡)が確認された。

試掘調査の結果をふまえた協議では、事業の計画変更が不可能であることから造成地区について記録保存の措置を講ずることとし、調査対象面積が広範囲にわたることなどから、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、県企業局、文化財保護課の三者で工事工程、調査計画、調査期間などについて協議し、平成5年4月から今井条里遺跡、今井川越田遺跡の発掘調査を開始することとした。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成5年3月25日付け企局土二第312号で埼玉県公営企業管理者から提出され、57条1項の規定による発掘調査届けが財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団理事長から平成5年4月1日付け財理文第1号及び126号で提出された。届けに対し、文化庁から平成5年9月2日付け委保第5の939号及び平成5年9月3日付け委保第5の952号で指示通知があった。

なお、両遺跡の発掘調査は平成6年度に継続されている。(文化財保護課)

る真下堀川以南が、調査範囲である。今井条里遺跡と今井川越田遺跡の一部が調査対象である。

平成6年度は、真下堀川の北側から関越自動車道までの間が調査予定範囲である。今井条里遺跡と今井川越田遺跡の残りの部分が調査対象となった。北廓遺跡については、協議により調査対象から除外された。

平成7年度は、関越自動車道の北側が調査予定で、今井条里遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡が調査対象となる。

調査の結果、検出された遺構は膨大であるため、細

かい経過は省略し概要を記すことにする。

4月12日文化財保護課、企業局担当者と調査工程打ち合わせの結果、今井条里遺跡を先行し、今井川越田遺跡は5月から開始することに決定。5月、表土掘削開始。6月、補助員による調査開始。1月、調査員2名増員。3月、本年度の調査を終了する。

整理・報告書刊行

整理作業は、平成6年4月1日から平成7年3月31

日まで実施した。4月から10月、遺物の水洗・注記、接合・復元と遺構図面の整理・トレースを並行して進める。6月から12月、順次遺物の実測・トレースを行う。12月から2月、遺構と遺物版組、原稿執筆。2月から3月、遺物写真撮影と割付け・編集作業。

報告書刊行作業は平成7年4月から9月30日まで行う。6月印刷業者決定。7月から9月校正・報告書の刊行。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査(平成5年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
常務理事兼管理部長 柴崎 光生
理事兼調査部長 中島 利治
管理部
庶務課長 萩原 和夫
主査 賛田 清
主事 菊池 久
経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主事 長 滝 美智子
主事 福田 昭美
主事 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
調査第三課長 村田 健二
主任調査員 磯崎 一
主任調査員 石坂 俊郎
調査員 山本 靖
調査員 伴 瀬宗一
調査員 岩田 明広
調査員 渡辺 清志

(2)整理事業(平成6年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
常務理事兼管理部長 加藤 敏明
理事兼調査部長 小川 良祐
管理部
庶務課長 及川 孝之

主査 市川 勇三
主事 長 滝 美智子
主事 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主事 福田 昭美
主事 腰塚 雄二

資料部

資料部長 塩野 博
資料部副部長 谷井 彪
兼資料整理第一課長
主任調査員 磯崎 一

(3)報告書印刷事業(平成7年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
常務理事兼管理部長 加藤 敏明
理事兼調査部長 小川 良祐
管理部
庶務課長 及川 孝之
主査 市川 勇三
主事 長 滝 美智子
主事 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主事 福田 昭美
主事 腰塚 雄二

資料部

資料部長 塩野 博
主幹(兼)資料部副部長 谷井 彪
(兼)資料整理第一課長
主任調査員 磯崎 一

II 遺跡の立地と環境

今井川越田遺跡の所在する児玉地域は、埼玉県の最北部に位置する。同地域は西縁から北縁を神流川と利根川により、また南縁から東縁を上武山地とそこから派生する丘陵によってそれぞれ画され、原始古代において独自の様相を持つことで知られている。

地形的には神流川によって形成された本庄台地と北側の利根川南岸の沖積低地、南側の上武山地で構成されるが、遺跡の分布は、主に台地部分とそれに接する丘陵部分に集中している。

上武山地から流れ出る諸河川とそれに沿う独立丘陵による区分に、遺跡の分布を考慮すると2、3の小地域の設定が可能となる。すなわち、まず本遺跡のある女堀川流域、生野山丘陵・浅見山丘陵を挟んで南側に広がる身馴川流域。さらに神流川流域と本庄台地北縁部などが細分される。

児玉地方の考古学的成果については既に詳しく論及され多くの成果が蓄積されている。以下ではこれらの成果に基づき本遺跡の周辺部を中心に変遷を概観する

ことにする。

旧石器時代の遺物が周辺部では古川端遺跡で出土しているが、該期については未だ不詳な部分が多い。

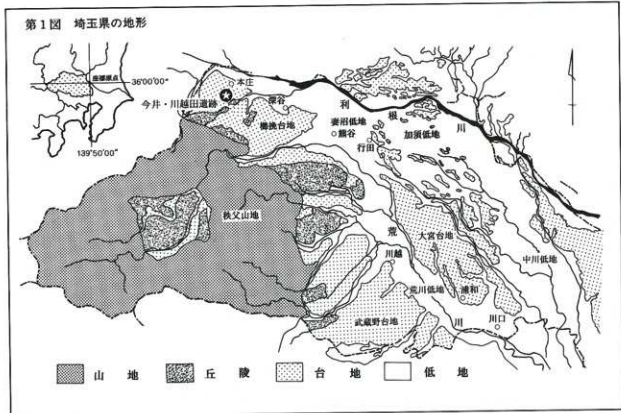
縄紋時代になると主に丘陵部を中心にして遺跡が分布するが、時期によって占地形態を異にすることが指摘されている。

草創期から早期では宍勝寺北浦遺跡、大久保山A遺跡が知られている。

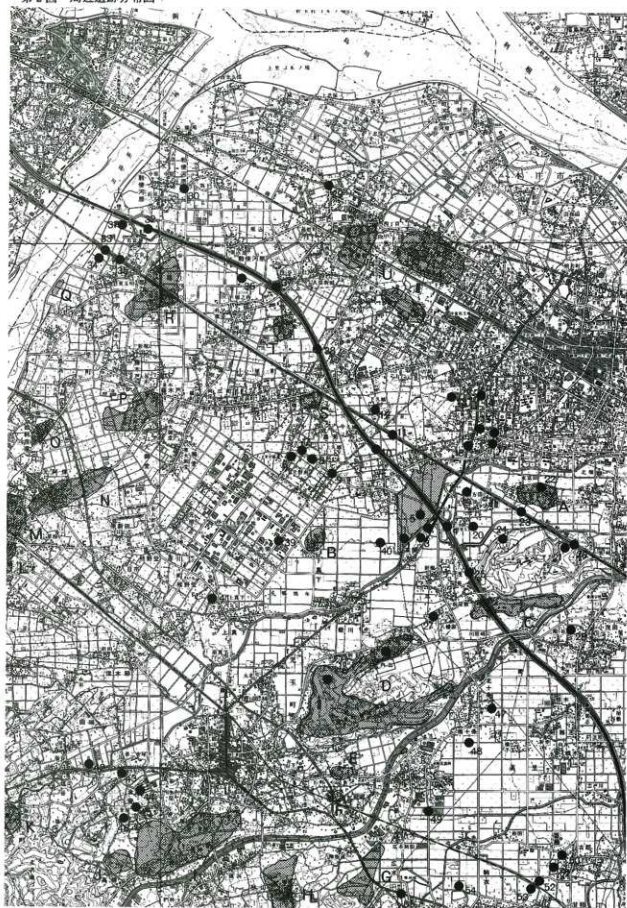
前期では大久保山I、B遺跡、下田遺跡等があり、本遺跡からは表採ではあるが、諸磯C式土器片が出土している。

中期は将監塚・古井戸遺跡で大規模な集落遺跡が調査されている。また大集落周辺部には小規模な集落が存在することが指摘されているが、本工業団地用地内においても真下堀川の北側で中期の土器片を検出している。

後・晩期になると古川端遺跡、諏訪新田遺跡、児玉町藤塚遺跡、堀向遺跡が周辺部に存在する。本遺跡で



第2図 周辺遺跡分布図



- 1 今井川越田遺跡 2 川越田遺跡 3 梅沢遺跡 4 後張遺跡 5 一丁田遺跡 6 立野南遺跡 7 八幡大神南遺跡 8 熊野太神南遺跡 9 今井遺跡群 10 久城南遺跡 11 諏訪遺跡 12 下郭遺跡 13 夏目遺跡 14 二本松遺跡 15 西富田新田遺跡 16 薬師遺跡 17 南大通り線内遺跡 18 社具路遺跡 19 九反田遺跡 20 四方田遺跡 21 前山1号墳 22 公卿塚古墳 23 下田遺跡 24 山根遺跡 25 雷電下遺跡 26 東谷遺跡 27 鷺山古墳 28 村後遺跡 29 小島本伝遺跡 30 原遺跡 31 臺遺跡 32 若宮古遺跡 33 高野谷戸遺跡 34 東殿御堂遺跡 35 天神林遺跡 36 中塚遺跡 37 耕安地遺跡 38 愛宕遺跡 39 古井戸遺跡 40 前田甲遺跡 41 真下境東遺跡 42 ミカド遺跡 43 枇杷橋遺跡 44 倉林後遺跡 45 倉林後B遺跡 46 念仏塚遺跡 47 前畑遺跡 48 樋之口遺跡 49 宮下遺跡 50 上耕地遺跡 51 下道堀遺跡 52 北谷戸遺跡 53 畑中遺跡 54 北貝戸遺跡 55 ミカ神社前遺跡 A 東富田古墳群 B 七ツ塚古墳群 C 塚本山古墳群 D 生野山古墳群 E 下町古墳群 F 大久保古墳群 G 広木大町古墳群 H 秋山古墳群 I 長沖古墳群 J 高柳古墳群 K 飯倉古墳群 L 植竹古墳群 M 関口古墳群 N 元阿保古墳群 O 西軒在家古墳群 P 大御堂古墳群 Q 長浜古墳群 R 帯刀古墳群 S 本郷南古墳群 T 東奥古墳群 U 旭・小島古墳群

第3図 今井川越田遺跡全測図 (1/1,500)



も遺構は伴わないが、少量の遺物が出土している。

弥生時代については、児玉地域内の遺跡数そのものが少ない。近年前期と考えられる下阿久原平遺跡が神泉村で調査されている。

中期前半の遺跡は神川町前組羽根合遺跡、美里町村後遺跡、周辺部では大久保山A遺跡が知られ、本工業団地用地内においても他地点ではあるが弥生期の遺構、遺物が出検された。後半では美里町神明ヶ谷遺跡、石神遺跡がある。

後期になると女堀川流域に比較的集中する傾向がある。中流域の有勝寺北裏遺跡、山根遺跡、塚本山遺跡、飯玉東遺跡、生野山遺跡、上流域の真鏡寺後遺跡、などが知られている。身堀川流域南縁では羽黒山遺跡などもある。いずれも丘陵上に存在しており、谷水田を小規模に経営していたと考えられる。

出土土器には隣接地域のものが混在して見られる。比企地方の古ヶ谷式土器と群馬県地方の樽式土器を中心にして、一部に二軒屋式土器が見られる。本遺跡においても櫛歯文土器片が出土している。

古墳時代になると遺跡数は大幅に増加する。前期では前半のものは少なく、女堀川流域の生野山遺跡、身堀川流域の志戸川遺跡程度である。

後半のものは女堀川流域や身堀川流域の沖積地に臨む台地縁辺部多数見られるようになる。

女堀川流域の本遺跡周辺部では、古川端遺跡、社具路遺跡、川越田遺跡、後張遺跡等があり、継続して大規模な集落が営まれた中核地域であったと考えられる。川越田遺跡では叩き目をもつ土器、後張遺跡では碧玉製石剣等特殊な遺物が出土している。

児玉地方最古の前方後方墳で4世紀代とされる鷲山古墳は、女堀川流域を一望する丘陵上に築造されている。前期末には女堀川流域の前山2号墳、身堀川流域の長坂聖天塚古墳をはじめ、粘土櫛や木棺直葬を埋葬主体部とする古墳が丘陵上に築造された。

そのほか5世紀代の古墳として、女堀川流域では格子目叩きをもつ埴輪が使用されている生野山將軍塚古

墳・金鑽神社古墳・公卿塚古墳がある。身堀川流域では底部穿孔壺の形骸化した埴輪をもつ川輪型天塚古墳、野焼きの埴輪をもつ長沖157号墳や、志戸川古墳などがある。

鬼高式期の集落遺跡は、主に本遺跡のある女堀川流域と、生野山丘陵・浅見山丘陵を挟んで南側に広がる身堀川流域、神堀川流域周辺部、本庄台地の北縁部に展開するが、女堀川流域には拠点的な大規模集落が比較的多く存在する。本遺跡の他、隣接する後張遺跡は前期から継続する大集落である。そのほか下田遺跡、ミカド遺跡などがある。女堀川北岸では西高田新田遺跡をはじめとする集落群も形成されている。

これらの集落では住居内に東国では最古段階とされるカマドが付設されている点が特に注目される。

前方後円墳についてみると、概ね60m級と40m級のものに分けられる。60m級は女堀川流域の生野山鏡子塚古墳、身堀川流域の生野山16号墳と秋山諏訪山古墳、本庄台地北縁部の下野堂二子山古墳があり、神堀川流域には存在しない。40m級は身堀川流域の長沖古墳群、広木大町古墳群や白石古墳群などに多数存在するが、神堀川流域では大規模な群集墳が存在するにもかかわらず白石鏡子塚古墳と中新里諏訪山古墳が知られるだけである。主体部は上毛野地域の影響を受けた胴張型の横穴式石室で、石材を神堀川や身堀川の河原石に依存し、大部分が片岩を用いている。御手長山古墳などでは角閃石安山岩を使用している。埴輪を供給した窯跡群も女堀川流域では八幡山窯跡群遺跡、蛭川窯跡、宥勝寺北裏窯跡群、赤坂窯跡群などがある。

奈良・平安時代になると遺跡の立地や性格は大きく変化し、それまで集落がほとんど存在しなかった本庄台地の中心部寄りに多数の掘立柱建物配した大規模な遺跡が確認されている。将監塚・古井戸遺跡、八幡太神南遺跡、皂樹原・檜下遺跡、中堀遺跡などである。

また女堀川流域と身堀川流域の水田地帯には条里制が施行され、近年まで地割りが残っていたのである。

III 遺跡の概要

今井川越田遺跡は、女堀川左岸の自然堤防上、標高70m付近に立地する。本庄市の南西部にあたり、兎玉町と隣接している。

女堀川の現河道は、兎玉町経川付近でその流路を東西方向から北東方向に変え、本庄今井工業団地用地の北東端部で再び東西方向に流れを変える。本遺跡は女堀川が北東方向に貫流する部分に所在する。

古墳時代の女堀川旧河道については、川越田遺跡付近でやや東側に流路をとり、九反田遺跡付近で現女堀川に合流するものと推定されている（増田 1985）。

遺跡の存在する自然堤防は、女堀川左岸に沿って南西から北東方向に細長く伸び、長さ約270m、幅約70mの範囲である。南端部以外は自然地形的には不明瞭であるが、集落については以下に述べるように比較的容易に範囲が限定できる。

すなわち東側は女堀川によって限定される。自然堤防は現状では女堀川の蛇行、侵食作用によって一部削られている部分があり、古墳時代後期の住居跡も削られている。旧状はさらに東側に延びていたと考えられる。

西側の境界は地形的には不明瞭であるが、ほぼ古墳時代後期の集落に沿って存在する、数本の溝跡によって画されている。この溝跡からは多量の鬼高式土器と須恵器が出土しており、集落を区画するものと考えられる。溝跡以西については、該期の水田跡は検出できなかった。

北側は西側と同様地形的に不明瞭である。また溝跡も第1号堰跡付近で途切れる。しかしながら第1住居跡群の西側に沿って道路跡が検出されており、底面近くからは鬼高式土器が出土している。以北については住居跡が検出されておらず、この付近が自然堤防、集落の北限と考えられる。

南側は河川跡、道路跡が検出されており、これによって南限が画される。河川跡からは溝跡と同様に多量の鬼高式土器、木器等が出土している。

河川跡の南側には別の自然堤防が存在し、住居跡が数軒検出されている。自然堤防を異にするこれらの住居跡は、正確には今井川越田遺跡とは別の集落に属するものと考えられるが、現時点ではこのように推定してよい。

以上の自然堤防上には、現在発掘調査中であるため遺構総数は不確定であるが、古墳時代後期以後に属する32軒の住居跡と掘立柱建物跡5棟、土壇17基、溝跡30条、円形周溝遺構4基、さらにピットが多数検出されている。

本遺跡で主体を占めるのは、古墳時代後期鬼高式期の遺構、遺物である。住居跡は概ね6世紀中葉から7世紀前期に属するものと考えられる。

今年度報告する範囲（第3図・スクリーントーン部分）は、今井川越田遺跡の集落北側部分に限られ、集落を画する溝跡については、次年度以降報告される予定である。住居跡の時期は次年度以降報告のものより全体にやや新しい。

古墳時代後期以前、及びほぼ中世以後について概略を示す以下のようにやや稀薄である。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、前期から晩期までの土器片が少量出土している。

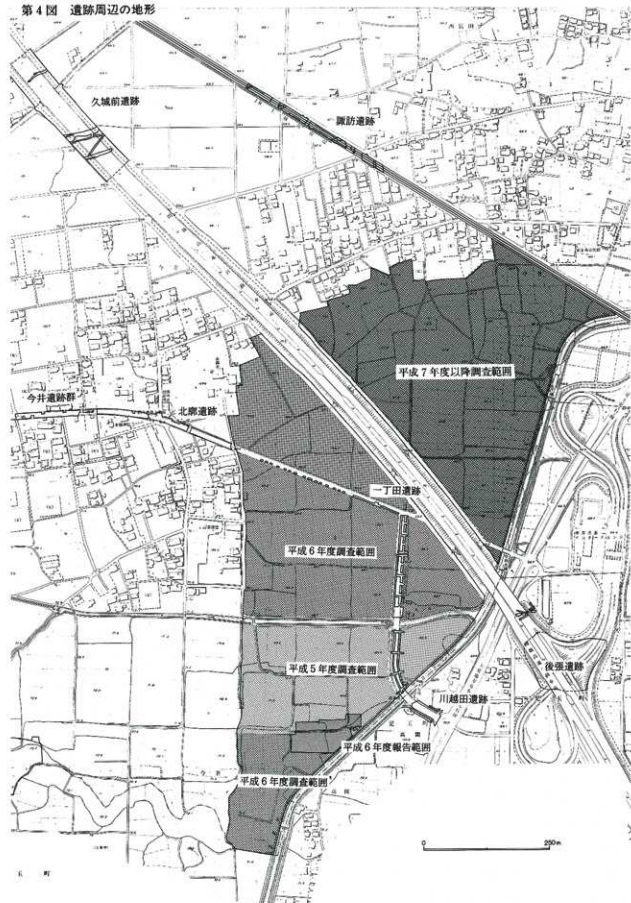
弥生時代の遺構についても、同様に検出できなかったが後期の櫛形土器片が少量出土した。

古墳時代については、前期の遺構は検出できなかったが、五領式土器のS字状口縁変形土器片が数軒の住居跡埋土中から数片出土している。本遺跡の北東側では該期の水田跡が検出されており、川越田遺跡では該期の住居跡も検出されている。

和泉式期の遺構、遺物は出土していない。

平安時代の住居跡は今回報告分では6軒である。1軒はさらに新しい可能性が高い。平安時代の水田跡は今井桑里遺跡に属する。集落の北側に位置し、浅間B火山灰直下で検出されたもので、住居跡との同時存在が十分考えられる。生産跡と居住域を検討する上で格好の資料を提供するものである。

第4図 遺跡周辺の地形



中世以後については、今井川越田遺跡では明確ではないが、この時期、水田として利用された可能性がある。現表土から住居跡確認面まで、土層が確認できる部分では水田土壌の堆積が確認されている。

今井糸里遺跡で検出された溝跡は、中世以後近年まで継続した利用が推定されるものもある。坪跡の境界区画溝が好例で、この溝跡は「猿尾状」と呼称される特徴的な取水形態を持っている。現状では真下堀川の南、北に位置する、第 号坪と仮称した坪跡に比較的良好に残存している。

また「本庄市史」（本庄市 1976）によると、久城田耕地が工業団地用地の西端を、真下堀から女堀川に落ちる用水堀をはさんで、すぐ隣接する位置に比定されている。ほぼ7町の範囲には上田、中田、下田が存在し、比較的上田が多い。また上畑、中畑も記載されており、水田だけではなくことがわかる。「元禄」、「元文」の記載があり、時期は近世とされている。

「文禄6年」の記載が有る「田今井之水帳」によると、必ずしも今井糸里遺跡の水田面積に照応するものではないが、上田、中田、下田が存在し、田は合わせて5町7反8畝5歩とある。

今井川越田遺跡の北側は用地の北端付近まで、東側は関越自動車道を越えて女堀川まで広大な範囲にわたって今井糸里遺跡が広がっている。

調査の結果古墳時代前期と平安時代の水田跡及び溝跡が検出されたが、古墳時代後期の水田跡は検出できなかった。

工業団地用地の北側縁辺部には、今井糸里遺跡を取り囲むように北郭遺跡、塔頭遺跡、地神遺跡が確認されている。

関越自動車道の北東側に所在する、塔頭遺跡、地神遺跡については平安時代の住居跡が検出されているが、調査終了後、順次報告がなされる予定である。

北郭遺跡は用地内から用地外にまで広がることから確認されている。既調査地点は、長興寺の南側付近で平安時代の住居跡が数軒検出されている。工業団地用地内では事前調査の結果長興寺の東側付近で、ほぼ同時

期の住居跡が確認されている。

今井川越田遺跡の北東方向約100m程には、かつて児玉工業団地の取付道路として調査された一丁田遺跡があり、溝跡、水田跡等が検出されている。今井川越田遺跡では検出されていない五領期の溝跡と、鬼高期の溝跡が調査された。（富田・赤熊ほか 1985）

女堀川を挟んだ東側、右岸の自然堤防上には川越田遺跡、梅沢遺跡、後張遺跡（立石 1983）が所在する。

川越田遺跡はまさに女堀川を挟んで対峙する位置に存在している。当事業団と児玉町教育委員会（悠河内 1985）によって調査がなされている。調査範囲が狭いため確実ではないが、古墳時代後期に関しては、今回報告する住居跡の時期より古い段階から集落が開始され、今井川越田遺跡とはほぼ同時期には廃絶するようである。

梅沢遺跡は遺構の検出が困難であったが、ほぼ同時期の住居跡が検出されている。

後張遺跡では古墳時代前期から後期の住居跡が188軒検出されたが、本遺跡より古い段階で廃絶している。遺跡周辺の土地利用状況は主に水田と畑である。

調査区内に関しては、畑は少なくとも大部分が水田で、用水堀及び、女堀川旧河道に沿って部分的に湿地が残存していた。

糸里遺構に関して、「本庄市史」によると水口部分が畑地として水田化されないようであると指摘がなされているが、現状では確認されなかった。

現水田は一筆毎に僅かな標高差があり、全体としては北、東方向に緩やかに傾斜している。前述のように引水形態は「猿尾状」を呈し、配水は概ね西から東、南から北へ向かって流水する。

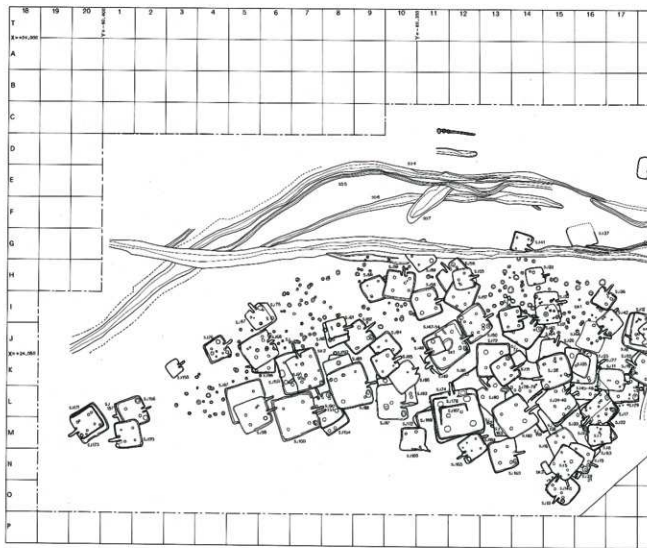
糸里以後の水田開発により、また自然堤防上ということもあり表土は比較的浅く、住居跡等の遺構は現水田床土直下で検出されている。したがって耕作による攪乱が多く、多量の湧水もあり遺構の確認は、非常に困難を極めた。

なお調査は広範囲にわたっているため、遺跡全体をおおう大グリッド(100m方眼)と内部の小グリッド(5

m方眼)の組み合わせで行った。

遺跡原点は遺跡の北西端部で、 $X=+25.000\text{km}$ 、 $Y=-60.600\text{km}$ の点である。大、小グリッドともに、南北方向に北から南に向かってアルファベット (A~T)、東西方向に西から東に向かってアラビア数字 (1~20)を付与した。またグリッド番号記載順序は、「大グリッド—小グリッド」の順で、グリッドの名称は北西杭の番号である。

第5図 今井川越田遺跡全測図 (1/600)



IV 古墳時代の遺構と遺物

概要

今井川越田遺跡の古墳時代の遺構は主に住居跡、掘立柱建物跡とそれらを区画する溝跡である。住居跡は重複が顕著で、単独で存在するものは少ない。

極く大まかに古墳時代後期の鬼高式期という点で、本遺跡全体の住居跡分布をみると、概ね6～7カ所に集中する部分が認められる。

すなわち、北端部に数軒で構成される1群がある。

今井川越田遺跡の中心部をなす部分は、北側の重複がもっとも顕著な部分と、中央部のやや集中度が低い部分、及び南側の鉄塔付近の南北に展開する部分に分

けられる。中央部は南北に蛇行する溝跡付近にわずかな空間があり、2分することが可能である。

旧河道によって隔てられた南端部の2群は、各々別の群を構成するとみられる。

掘立柱建物跡は、概して住居跡が疎らな部分に存在している。

今年度報告する該期の遺構は、主に遺跡の北側に位置する住居跡113軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2軒、土壇1基、ピット群1カ所である。溝跡等については次年度以後報告する予定である。

上述の住居跡の集中する範囲に対応させると、北端部の1群と、本遺跡の主体をなす部分のうち北側の重複顕著な部分、及び中央部の一部である。

これらの住居跡群は、完全に連続しているわけではなく、わずかな遺構空白部分が存在しており、外観上さらに9群に細分される。これらを第1住居跡群～第9住居跡群と仮称する。なお各住居跡群に所属する住居跡番号は、第1表今井川越田遺跡住居跡群一覧表に示した。以下の報告はこの住居跡群別に行うこととする。

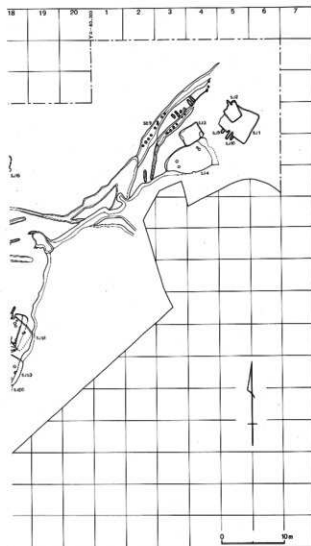
第1住居跡群は、北端部に位置する4軒の住居跡によって構成される一群である。

女堀川旧河道によって、各住居跡は東側を攪乱されており、第1号住居跡は南半部を削平されている。したがって旧状は推測の域を出ないが、住居跡群はさらに東側に広がっていた可能性がある。

本遺跡の主体をなす部分は第2住居跡群～第8住居跡群に分けられる。

第2住居跡群は、南東端部に位置する細長い住居跡群で、10軒で構成される。第13号住居跡は女堀川旧河道によって、一部攪乱を受けている。第8号住居跡から第39号住居跡を結ぶ線以東は、住居跡が存在せず、すぐに旧河道となる。したがって、この付近が集落の限界となる可能性が大きい。

西側に位置する、今回未報告の住居跡との間は空白



城が存在し、住居跡群の境界をなす。遺構確認段階で第8(7)、16号住居跡が比較的明瞭に確認されたため、第4住居跡群と区別した。

第3住居跡群は東端部に位置する、南北に細長い住居跡群で、8軒で構成される。第1住居跡群と同様に3軒の住居跡が、女堀川日河道によって大きく擾乱を受けている。

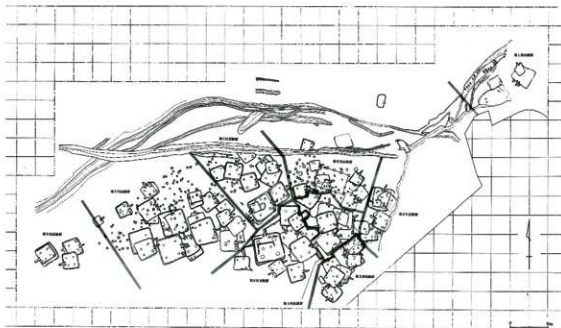
西側に存在する第5住居跡群との間には、若干の空間が存在する。また第4住居跡群の第17、45号住居跡と、第29号住居跡はわずかに重複している。

第4住居跡群は最も重複が顕著な部分で、遺構の検出は困難を極めた。19軒で構成され、鬼状の住居跡群をなす。

北西部分の第28、43、64号住居跡は、第8住居跡群との間に遺構空白域が存在する。北側の第5住居跡群との境界は、第43号住居跡が重複するが比較的明瞭である。

第5住居跡群は9軒で構成され、重複関係は最も少ない。東、西の小群(第31~34、41号住居跡と第36~37、42、44号住居跡)に細別が可能で、各々は直線状の存在形態をなす。遺構空白部分には多数のピットが存在する。また第1号掘立柱建物跡も重複している。

第6図 住居跡群分割図



所属する各住居跡出土土器の様相は、小形の環形土器を主体とする、鬼高式でも新しい段階に属するものである。

第6住居跡群はほぼ中央部分に位置し、遺構密度はやや低い。12軒で構成され、出土土器に時期差があるが大形住居跡(第47号住居跡)、中形住居跡、小形住居跡(第48~49、55号住居跡)がある。

東、西、南側の各住居跡群とは、明確な遺構空白域が存在する。

第7住居跡群は西半部に位置する、比較的広範囲にわたる大形の住居跡群で、28軒で構成される。

2~3の小群に細別が可能である。すなわち南側に存在する大形住居跡を含む一群、北西部に位置する小形住居跡の一群と東側の直線状の配列をなす一群である。

特に東側の小群は、大形住居跡の小群とは第88号住居跡カマドが重複するのみで、未報告部分を考慮しても重複関係は少なく、わずかな間隔を保っている。北西側の塊状を呈する小群も同様に、第96号住居跡と第155号住居跡がわずかな部分で重複するのみである。

南側に今回未報告の住居跡が数軒ある。

第8住居跡群は第4住居跡群とともに最も重複関係

が顕著な一群である。本報告では17軒であるが、今回未報告分が南側に数軒続いている。

本住居跡群の範囲は、黒色土が広く分布し重複顕著でもあり、遺構の検出は困難を極めた。

第74号住居跡は本遺跡で最大の住居跡である。

第9住居跡群は、前述の中央部のやや集中度が低い部分に位置する。5軒で構成され、未報告分を合わせても7軒の極く小形の住居跡群である。

他の住居跡群とはかなり距離をおいており、単独に近い存在である。

なお各住居跡群は、集落区画と考えられる溝跡からはほぼ一定の距離をおいている。

以上出土土器の時間差の問題、未報告住居跡の存在等さらに検討すべき点が多いが、暫定的に今回報告分を中心にして住居跡群を細分した。次章以下の記述は住居跡群毎に行うことにする。

第1表 今井川越田遺跡住居跡群区一覧表

住居跡群	住居跡番号	軒数
第1群	1、4、9、10	4軒
第2群	5、8、13、14、15、16、21、30、39、63	10軒
第3群	6、12、19、20、29、51、52、53	8軒
第4群	17、22、23、24、25、26、27、28、35、38*、40、43、45、46、64、65、79、158、159	19軒
第5群	31、32、33、34、36、37、41、42、44	9軒
第6群	47、48、49、50、54、55、56、57、58、59、66、69	12軒
第7群	60、61、62、67、68、75、76、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、151、152、153、154	28軒
第8群	70、71、72、74、77、78、80、81、82、160、162、163、164、165、167、168、172、178	17軒
第9群	156、157、170、171、173	5軒
掘立柱建物跡	SB1	1棟
平安	2、3、7、11、18、155、169	7軒
掘立柱建物跡	SB2、3	2棟

住居跡の欠番 73、83 2軒

*38は第38号跡

1. 第1住居跡群

第1号住居跡 (第8、10図)

本住居跡は K4D5 グリッド付近に位置する。

本遺跡の北西端部に位置し、以北は住居跡は検出されていない。第1住居跡群に属する。

住居跡の南側は、北東方向に向かって旧河川跡が検出されているが、本住居跡もこの旧河川跡による擾乱を顕著に受けている。

平面形は復元推定によるところが大きいが、ほぼ長方形と考えられ、規模は5.20×5.04m、深さ34cmを測る。主軸方位はN-122°-Wを測る。

床面は硬質面がなく不明瞭ではっきりしない。貼り床は検出できなかった。掘り方は存在しない。

床面出土遺物は、カマド内部のものに限られる。

壁は明確に残存していたのはカマド壁のみであるが、やや傾斜気味である。

壁溝、柱穴、貯蔵穴は存在しない。

カマドは南西壁ほぼ中央部に設置され、遺存状態は

比較的良好である。燃焼部底面は焚き口付近からはほとんど焼けていない。底面は平坦で、規模は0.48×0.39m、深さ0.27mを測る。燃焼部から煙道部へそのまま移行する。

煙道部は比較的短く、壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.88×0.39mを測る。

煙出し部分は比較的良好な遺存状態で、略方形をなす。壁は厚さ1~2cmの範囲が加熱で赤硬化している。

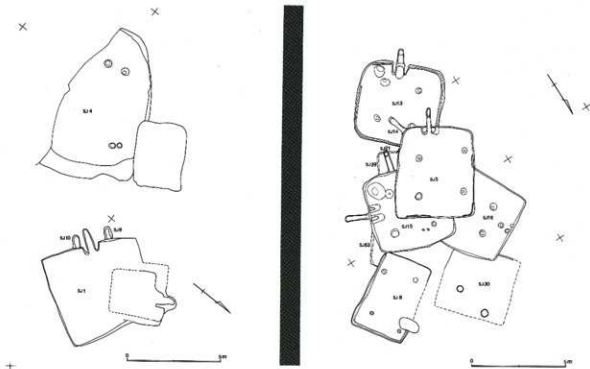
袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。

カマド内部からは変形土器が2~3個体分出土している。

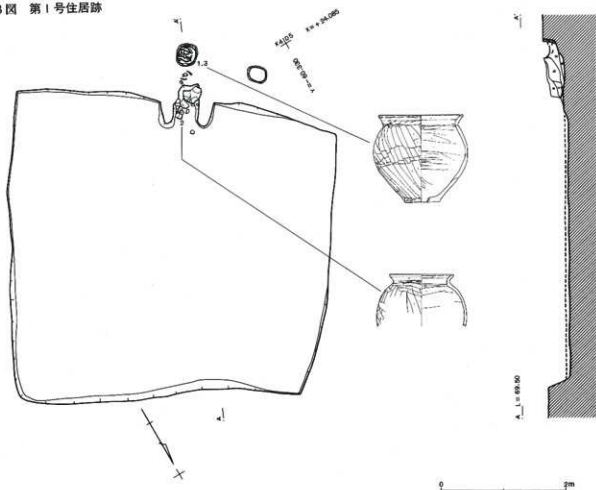
出土遺物の総点数は272点で、環形土器が29点、高環形土器が14点、変形土器が229点である。

環形土器は、やや大形で口縁部が外反するものと有段口縁のものである。

第7図 第1・第2住居跡群



第8図 第1号住居跡



第1号住居跡出土土層注

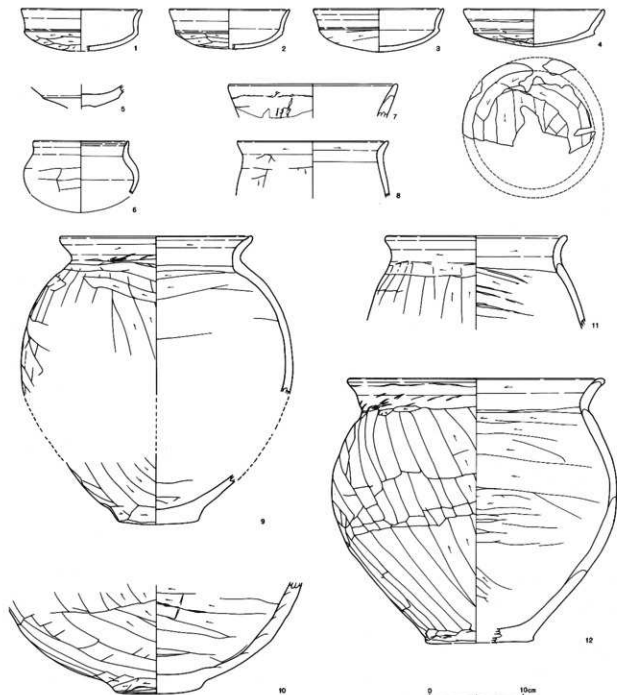
- 1 黒褐色 粘性強、ローム、ローム粒多量
 2 黒褐色 粘性強
 3 灰褐色 砂質
 4 暗灰褐色 砂質
 5 暗灰褐色 粘性強
 a 灰褐色シルト 細粒砂、酸化第一鉄、酸化マンガン斑

- b 黒褐色シルト 砂質、バミス少量、ロームブロック、礫少量、多量の遺物包含
 c 暗灰色シルト 細~中粒砂、酸化第一鉄、酸化マンガン斑
 d 黒褐色シルト 粘性強、焼土、炭化物多量、砂微量
 e 黒褐色シルト 焼土、炭化物少量

第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	12.8	(4.5)		A1	B	B	30	埋土	口縁外反、稜部ココナテ+寛削り、黒斑
2	環	12.8	(4.2)		A1	B	E	30	埋土	口縁屈曲外反、稜部棒状工具+寛削り
3	環	13.8	4.6		A1	B	C	50	埋土	口縁外反、稜部棒状工具+寛削り
4	環	15.0	4.0		A1	A	A	60	埋土	砂質、段部沈線、稜部棒状工具+寛削り
5	高環	9.7	(2.5)		A1	B	B	70	埋土	砂質、稜部棒状工具+寛削り?
6	小形壺	10.2	(5.6)		A1	A	B	30	埋土	砂質、口縁凹線、頸部以下横寛削り
7	甕口縁部	17.8	(3.6)		E5	B	B	20	カマド	口縁外反、輪積み斑、内面黒斑
8	小形甕	16.0	(6.0)		AC1	B	B	20	埋土	口縁外反、頸部以下縦寛削り、摩滅顯著
9	丸甕		(5.1)	8.5	E5	A	A	40	カマド、No 2	口縁外反、頸部以下縦寛削り+ナテ、黒斑
10	甕		(11.5)	9.1	E5	B	A	60	カマド袖+No 2	平底凸出寛削り、器肉厚い、黒斑
11	甕	18.9	(9.9)		E5	A	B	80	埋土	口縁外反、頸部以下縦寛削り
12	丸甕	26.7	27.9	11.3	E5	A	B	80	カマド爐出し部	口縁外反、頸部以下斜め寛削り、黒斑

第9図 第1号住居跡出土遺物



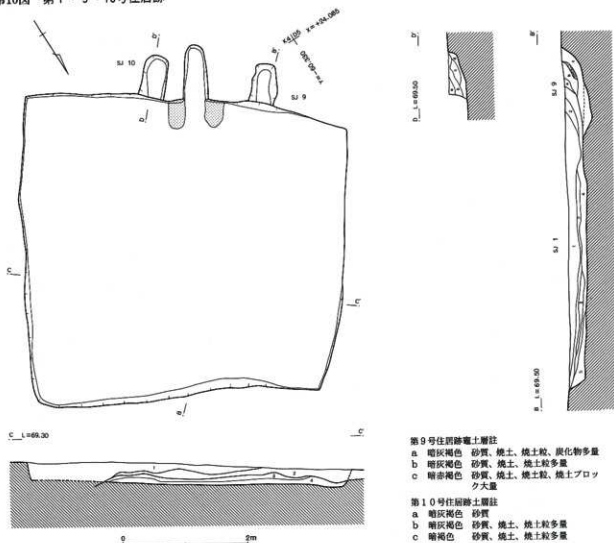
第9号住居跡 (第8、10図)

本住居跡はK4D5グリッド付近に位置する。第1号住居跡のカマド付け替えの可能性もあるが、煙道部の遺存状態を考慮し、同住居跡によって切られたものと把握しておく。現状での規模は 0.72×0.38 m、深さ26cmを測る。カマド軸方向はN-105.5°-W。出土遺物はない。

第10号住居跡 (第8、10図)

本住居跡はK4D5グリッド付近に位置する。第9号住居跡同様カマド付け替えの可能性もあるが、煙道部の遺存状態を考慮し、同住居跡によって切られたものと把握する。現状での規模は 0.72×0.38 m、深さ26cmを測る。カマド軸方向はN-105.5°-W。出土遺物はない。

第10図 第1・9・10号住居跡



第4号住居跡 (第11図)

本住居跡はK4E4グリッド付近に位置する。

第1号住居跡の西側約2.5mに存在し、第1住居跡群を構成する。

新旧関係は、第3号住居跡によって本住居跡が切られる。また南側は旧河川跡によって上層から大きく攪乱を受け壁等は壊損していない不明である。

平面形は南側は不明瞭であるが略長方形。規模は現状で8.06×5.72m、深さ35cmを測る。

長軸方向はN-56°-Eを測る。

床面ははっきりしなかったが、ほぼ平坦。

掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

壁は全体に遺存状態が悪く一定しないが、残存する

部分では傾斜が顕著である。壁溝は存在しない。

柱穴は4本で、P3、P4は極く接近している。P1が径40cm、深さ62cm、P2が径44cm、深さ79cm、P3が径46cm、深さ72cm、P4が径52cm、深さ31cmを測り深さはいずれも浅い。P2は不明瞭ながら柱痕跡が認められた。

柱穴配置は直線状をなす。

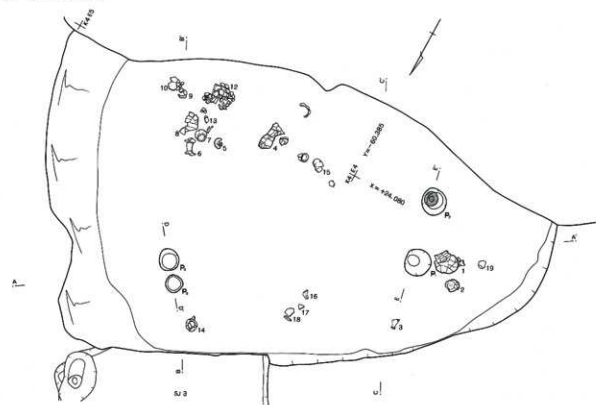
柱穴間隔はP1P2が1.07m、P2P4が4.30m、P3P4が0.38m、P1P3が3.82mを測る。

貯蔵穴は存在しない。

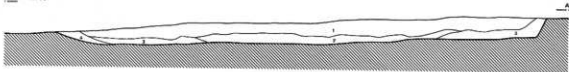
カマドは残存していないが、南壁に設置されていた可能性が高い。

図示した以外の出土遺物総数は1193点で、坏形土器

第11図 第4号住居跡



A_L=69.40



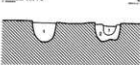
D_L=69.40



B_L=69.40



F_L=69.40



C_L=69.40



第4号住居跡土層註

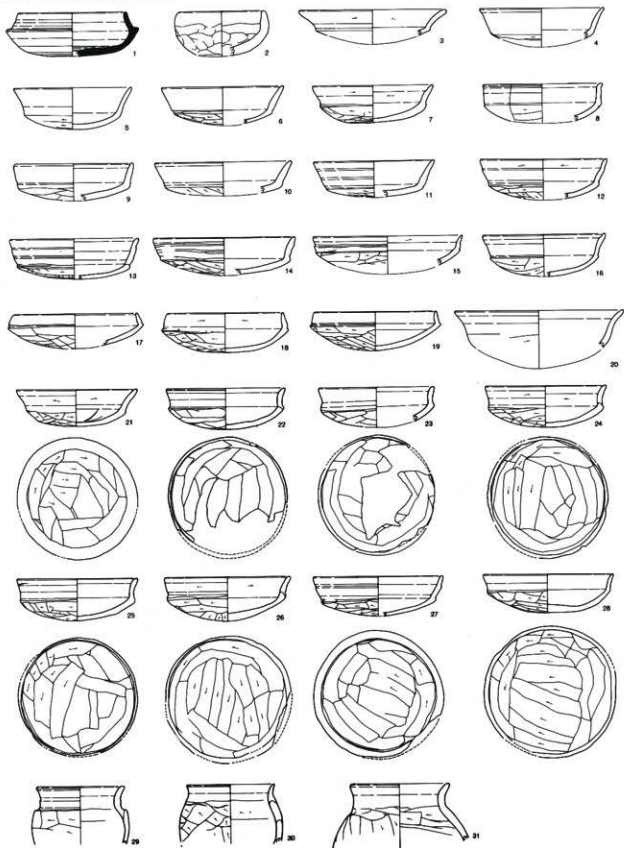
- 1 黒色シルト 均質なシルト、酸化第一鉄、酸化マンガ班
- 2 黒色砂質シルト 細粒砂、パミス微量
- 3 黒褐色粘土質シルト 粘性強、炭化物微量、ロームブロック微量
- 4 暗褐色粘土質シルト 粘性強、炭化物少量、鉄班

第4号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性強、ローム少量
- 2 黒褐色シルト 粘性強、ローム、ローム粒、ロームブロック多量

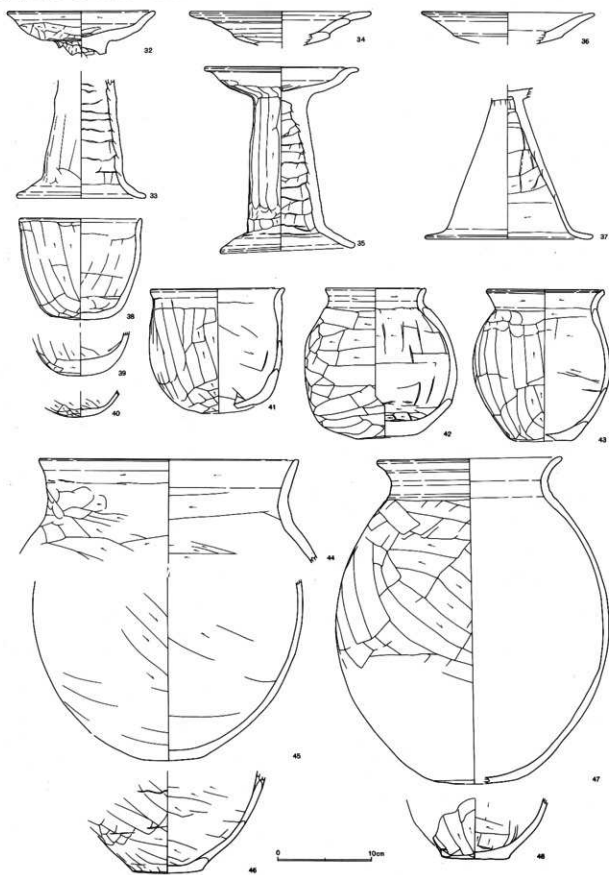
0 3m

第12図 第4号住居跡出土遺物(1)



0 10 cm

第13図 第4号住居跡出土遺物(2)



が215点、高環形土器が14点、甕形土器が960点、甕形土器が1点であった。

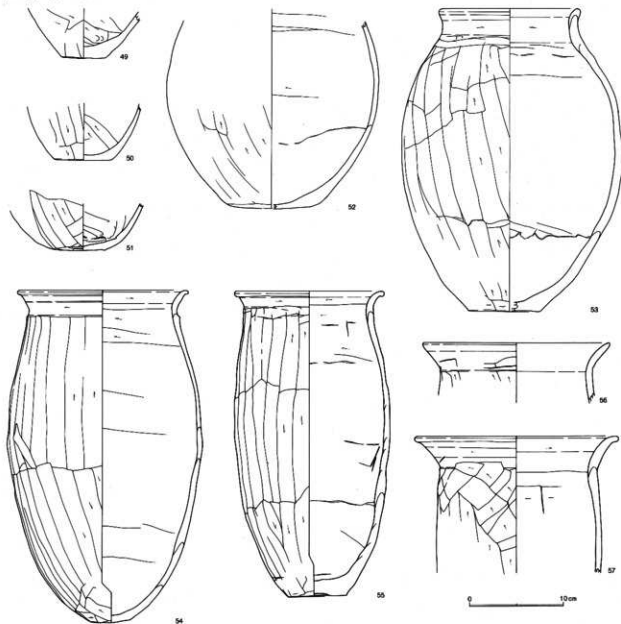
環形土器は口縁部が外反するもの、内傾するもの、有段口縁のものがある。法量は小形のものやや大形

のものがあるが、小形のもの为主体である。甕形土器は頸部に段を持ち胴部がやや膨らむものである。

第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵環	11.4	(4.6)		F1	A	H	70	埋土	ロクロ左回転、器肉厚い
2	椀	9.2	(4.7)		A1	A	B	50	埋土	体部外面指頭ナデ、器肉厚い
3	環	19.3	(3.73)		A5	A	B	25	埋土	口縁外反、底部工具ナデ+荒削り

第14図 第4号住居跡出土遺物(3)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
4	環	13.2	(3.9)		AE1	A	E	25	埋土	口縁外傾、稜部ヨコナテ+笱削り、黒斑
5	環	13.2	4.4		A1	A	E	70	埋土	口縁外反、稜部ヨコナテ+笱削り
6	環	13.0	(4.1)		A1	A	B	50	埋土	口縁外傾、稜部棒状工具+笱削り
7	環	12.8	4.0		A1	A	E	60	埋土	稜部棒状工具+笱削り、黒斑、器内厚い
8	環	12.8	(4.0)		A1	A	E	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナテ+笱削り
9	環	12.6	(3.9)		A1	A	E	20	埋土	口唇凹縁、稜部ヨコナテ+笱削り、炭化物
10	環	14.6	(3.4)		DE2	A	E	40	埋土	口縁外傾、稜部ヨコナテ+笱削り
11	環	12.8	(3.8)		CI	A	A	20	埋土	段部工具ナテ、稜部工具ナテ+笱削り
12	環	13.4	(4.4)		C5	B	F	40	埋土	段部ヨコナテ、稜部棒状工具+笱削り
13	環	13.8	4.3		AC1	B	A	60	埋土	段部棒状工具、稜部棒状工具+笱削り、黒斑
14	環	14.9	(4.0)		AE1	A	B	70	埋土	段部棒状工具、稜部棒状工具+笱削り
15	環	15.8	(4.1)		A1	A	A	25	埋土	段部棒状工具、稜部工具ナテ+笱削り
16	環	13.0	4.5		AE1	A	B	20	No12	口唇内湾、稜部棒状工具+笱削り
17	環	13.0	(3.7)		AD1	B	A	70	埋土	口縁小さく内傾、稜部棒状工具+笱削り
18	環	12.4	4.3		AD1	A	B	80	埋土	口縁内傾、稜部棒状工具+笱削り
19	環	13.0	4.2		A1	A	A	50	埋土	口縁内傾、稜部棒状工具+笱削り
20	環	18.0	(4.0)		A2	A	B	10	埋土	口縁外反、稜部ヨコナテ+笱削り
21	環	12.4	4.0		A2	A	B	90	No10	口縁外反、稜部工具ナテ+笱削り、黒斑
22	環	12.6	4.4		A1	A	E	70	No6	稜部棒状工具+笱削り、器内厚い
23	環	12.2	(4.4)		A1	A	B	80	No14	稜部ヨコナテ+笱削り、器内厚い
24	環	12.8	4.4		A1	A	E	90	No7	稜部工具ナテ+笱削り、器内厚い
25	環	12.8	4.5		A1	A	B	90	No12	稜部棒状工具+笱削り、器内厚い
26	環	13.4	4.7		A1	A	B	90	No13	稜部棒状工具+笱削り、器内厚い
27	環	13.8	4.2		A1	B	A	80	No18	段部棒状工具、稜部棒状工具+笱削り
28	環	13.8	4.0		A1	A	C	90	床直	稜部ヨコナテ+笱削り、内面粘土付着
29	台付き甕	9.2	(6.1)		A2	A	B	70	埋土	口縁外反、頸部横笱削り、器内厚い
30	台付き甕	9.2	(6.3)		AD4	A	B	30	埋土	口縁外反、胴部横笱削り、輪積み疵
31	小形壺	10.3	(6.1)		AE5	A	B	70	埋土	口縁やや外反、体部縦笱削り、黒斑
32	高環	15.5	(4.7)		A2	A	B	80	埋土	環部浅い、外面未調整残存、黒斑
33	高環脚部	(12.5)		14.7	A2	A	B	80	埋土	長脚、肩部短い、内面輪積み疵
34	高環	19.1	(3.7)		A1	A	B	90	No7	環部浅い、段部棒状工具
35	高環	15.9	19.7	14.2	A2	A	B	90	No7	環部浅く長脚、内面輪積み疵、黒斑
36	高環	18.0	(2.7)		A1	A	B	50	埋土	環部浅い、稜部棒状工具+笱削り
37	高環	(15.9)		16.7	A1	A	C	80	埋土	長脚、肩部屈折、内面笱削り
38	碗	12.8	10.7	6.1	AE2	A	A	80	No24	口唇尖る、体部縦笱削り、黒斑
39	底部	(4.7)		5.1	AC2	B	A	80	埋土	器内厚い、丸底笱削り、胴部縦笱削り、黒斑
40	底部	(2.9)		4.8	A2	A	B	80	埋土	丸底笱削り、黒斑
41	小形甕	20.7	13.2		A2	A	B	80	No15	口唇肥厚、頸部以下縦笱削り、黒斑
42	小形壺	10.4	16.0	5.9	AE5	A	B	90	No3	器内厚い、胴部横笱削り、黒斑
43	小形甕	12.3	16.1	5.8	E5	A	B	60	No19	口縁凹曲外反胴部縦笱削り後指頭ナテ、黒斑
44	丸甕	27.3	(10.9)		AD2	A	B	70	埋土	口縁やや外反、頸部横笱削り、黒斑
45	甕底部	(19.1)		7.5	CE5	A	A	50	埋土	丸底、胴部斜め笱削り、黒斑
46	甕底部	(10.8)		7.4	E5	A	B	70	埋土	平底笱削り、胴部斜め笱削り、黒斑
47	甕	19.3	(34.4)		AE5	A	B	50	No1	口縁外反、頸部縦笱削りによる段、黒斑
48	甕底部	(6.4)		7.1	E5	B	E	60	埋土	小形平底笱削り、胴部縦笱削り、黒斑
49	甕底部	(5.2)		4.1	AE5	B	B	60	埋土	平底笱削り、胴部笱削り、黒斑
50	底部	(6.1)		6.2	CE2	A	B	40	埋土	平底笱削り、胴部笱削り、黒斑
51	甕底部	(4.8)		6.1	CE2	A	E	80	埋土	平底笱削り、胴部縦笱削り、黒斑
52	甕	(19.7)		10.1	CD2	B	B	60	No11	平底笱削り、胴部縦笱削り、黒斑
53	甕	24.0	32.0	7.7	E5	A	B	70	No9	口縁直立外反、頸部以下縦笱削り、黒斑
54	甕	17.7	35.2	4.0	E5	A	B	50	No5	口唇肥厚外反頸部縦笱削りによる段、黒斑
55	甕	15.7	32.3	6.2	E5	A	B	90	No13	口唇肥厚口縁外反、頸部以下縦笱削り、黒斑
56	甕	20.0	(6.4)		AE5	B	A	25	埋土	口縁屈曲外反、頸部縦笱削り、黒斑
57	甕口縁部	20.9	(14.5)		E5	A	E	70	No16+埋土	口縁外反、頸部斜め笱削り、黒斑

2. 第2住居跡群

第5号住居跡 (第15、16図)

本住居跡は K3N16 グリッド付近に位置する。

第2住居跡群のほぼ中央部にあり、本住居跡群の東側は女堀川が北流する。新旧関係は、本住居跡が周辺部分の全ての住居跡を切っており最も新しい。

平面形はカマド対壁がやや長い台形状乃至長方形で、規模は4.88×4.30m、深さ25cmを測る。

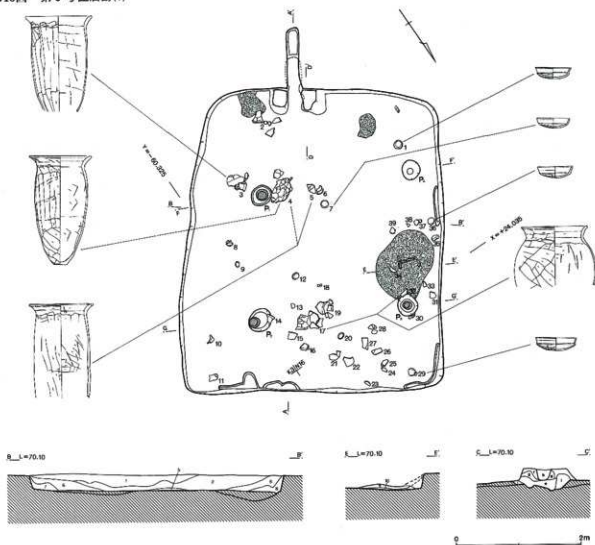
主軸方位は N-147°E を測る。

西壁下及びカマド両袖付近からは比較的少量の炭化物、焼土が検出されている。

床面はほぼ平坦である。貼り床は存在しない。掘り方は一定しないが北、東隅とカマド前方から中央部を掘り残し、他の部分を浅く掘り窪めるものである。床面出土遺物はカマド左袖部、P1 付近、北西壁下中央部及びカマド対壁中央部に集中出土している。

壁はほぼ直立する。壁溝は部分的に認められ、北西

第15図 第5号住居跡(1)



第5号住居跡土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、炭化物粒微量、砂粒、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 粘性有、炭化物粒微量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、炭化物粒微量、色砂粒、ロームブロック少量
- 4 黒褐色シルト 焼土粒、焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- 5 暗褐色シルト 粘土質、焼土粒、炭化物多量、パミス少量、ロームブロック少量

- a 黒褐色シルト 粘性有、焼土多量、炭化物微量、灰色粘土少量
- b 黒褐色シルト 粘土質、炭化物多量
- c 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック多量、炭化物多量、ロームブロック多量
- d 黒褐色シルト 粘性強、ロームブロック多量
- e 灰黄褐色シルト 粘土質、褐色砂質シルト、焼土、炭化物粒、炭化物多量
- f 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック、炭化物多量、灰色粘土微量、ロームブロック少量

壁から北東壁の一部に設置される。

柱穴は4本で、いずれも掘り込みは浅い。P1が径22cm、深さ11cm、P2が径36cm、深さ10cm、P3が径30cm、深さ18cm、P4が径29cm、深さ17cmを測る。P4以外の3本は、柱痕跡が検出された。柱穴配置はP3、P4が北西壁よりにずれた方形配置をなす。柱穴間隔はP1P2が2.00m、P2P3が2.48m、P3P4が2.14m、P1P4が2.42mを測る。

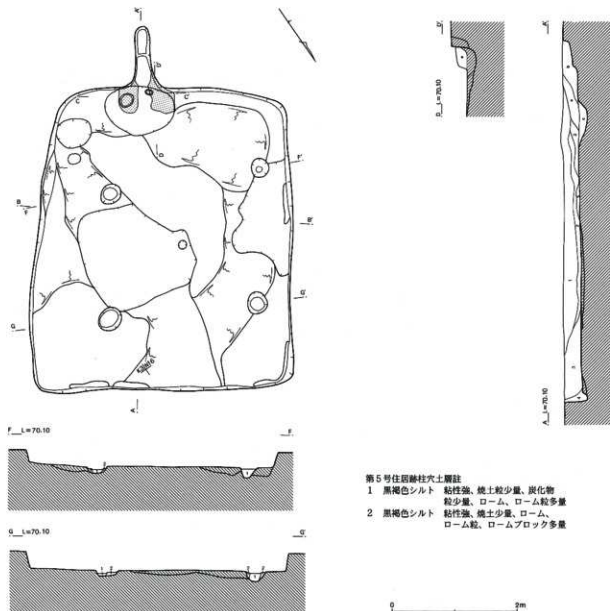
貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは南西壁東寄りに設置され、遺存状態は良好

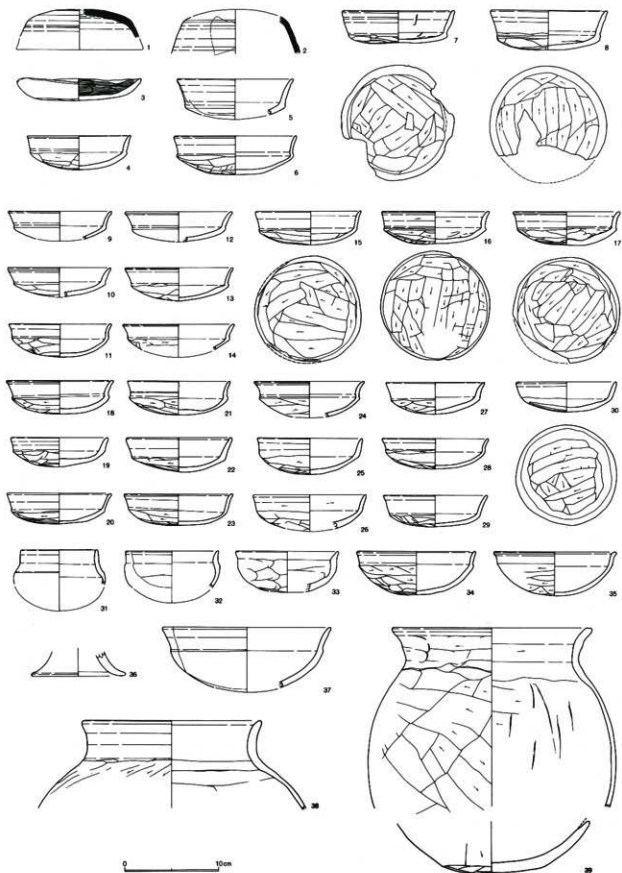
である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。規模は0.44×0.30m、深さ0.28mを測る。燃焼部奥壁から緩い段をなして煙道部へ移行する。煙道部はやや短く中央部で緩い段をなし、壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.93×0.26mを測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は僅かに掘り込まれる程度で、袖下は楕円形に掘り込まれる。

図示した以外の出土土器の破片総数は1,388点で、環形土器が643点、甕形土器が745点である。

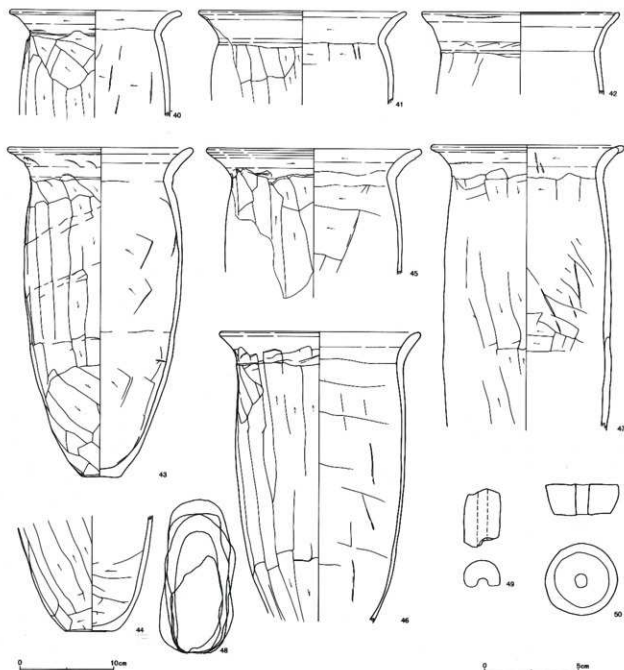
第16図 第5号住居跡(2)



第17図 第5号住居跡出土遺物(I)



第18図 第5号住居跡出土遺物(2)



第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋		(3.0)		F1	A	II	50	埋土	天井部鑑割り、ロクロ左回転
2	須恵蓋		(3.9)		F1	A	H	10	埋土	ロクロ左回転
3	甌	12.3	2.3	9.7	CE1	A	B	80	No34	甌底部転用か?内面ミガキ、黒色
4	環	11.0	3.6		A1	A	B	60	No24	口唇肥厚、稜部棒状工具+鑑割り
5	環	13.4	(4.2)		AC1	A	F	30	埋土	段部沈線、稜部棒状工具+鑑割り
6	環	13.0	4.1		A1	A	B	30	No29	口縁ヨコナデ、稜部ヨコナデ+鑑割り
7	環	11.7	3.5		CE1	A	F	90	埋土	段部工具ナデ、稜部工具ナデ+鑑割り、黒斑
8	環	12.3	4.3		CE1	A	F	80	埋土	段部工具ナデ、稜部棒状工具+鑑割り、黒斑
9	環	10.0	(3.3)		A1	A	B	25	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+鑑割り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
10	環	11.0	(3.1)		DE2	A	E	50	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
11	環	11.0	3.5		A1	A	C	80	埋土	口唇肥厚、稜部工具ナデ+寛削り、二次加熱
12	環	11.4	(3.1)		A1	A	C	40	埋土	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り
13	環	11.6	3.6		A1	A	C	90	Na 8	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り、二次加熱
14	環	11.8	(3.5)		A1	A	A	30	埋土	口唇やや肥厚稜部ヨコナデ+寛削り指頭押圧
15	環	11.2	3.6		A1	B	B	80	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
16	環	11.4	3.5		A1	A	B	90	Na20	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り、黒斑
17	環	11.9	(3.6)		AC1	A	E	90	Na12	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
18	環	11.4	3.5		A1	B	B	100	Na 1	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り
19	環	10.4	3.1		AE2	B	B	80	Na 6	口縁厚い、稜部ヨコナデ+寛削り
20	環	11.1	3.1		A1	A	B	80	埋土	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り
21	環	11.0	3.6		AE2	A	C	50	Na23	口縁ヨコナデ、稜部工具ナデ+寛削り
22	環	11.2	3.6		A2	A	B	100	Na36	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
23	環	11.6	3.3		A1	A	B	60	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
24	環	11.8	(3.9)		AE2	A	B	25	Na19	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り
25	環	11.3	3.85		AE2	A	B	80	埋土	口縁直立、稜部ヨコナデ+寛削り
26	環	12.0	(3.9)		A1	A	B	50	埋土	口縁ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
27	環	10.2	3.5		AE2	A	B	100	Na 9	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
28	環	11.4	3.2		A1	A	B	70	Na29	口縁やや外反、稜部ヨコナデ+寛削り
29	環	11.1	3.3		A1	A	B	70	Na30	口唇外反、稜部棒状工具+寛削り
30	環	10.5	3.2		A1	A	B	100	Na 7	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
31	椀	8.0	(3.6)		A1	B	C	25	埋土	口縁内傾直立、二次加熱
32	椀	9.8	(4.0)		A1	B	C	25	埋土	口唇肥厚、肩部横削り、摩滅顕著
33	椀	10.0	(4.3)		A1	A	A	20	埋土	体部指頭ナデ、器内厚い
34	環	12.6	4.5		AE1	A	B	20	Na31	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り、器内薄い
35	環	13.0	4.6		A1	A	B	20	Na37	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り、器内薄い
36	脚部		(2.5)	9.8	AD1	B	A	25	埋土	台付き妻脚部?摩滅顕著
37	環	17.9	(6.4)		A1	A	C	10	Na19	口縁外反、稜部ヨコナデ+寛削り、摩滅顕著
38	壺	18.9	(9.3)		E5	B	B	80	Na19+25	口縁やや外反、頸部下斜め削り、黒斑
39	丸	20.1	(27.0)	11.0	C2	A	A	40	Na17+32	口縁外反、頸部縦削りによる段
40	甕	17.9	(11.2)		CE2	A	B	50	Na10+11	口縁屈曲外反、頸部斜め、縦削り、黒斑
41	甕	21.9	(9.9)		AE2	A	B	20	Na11	口縁屈曲外反、頸部縦削り
42	甕	20.8	(8.7)		C2	A	A	40	カマド	口縁屈折外傾、頸部縦削り、二次加熱
43	甕	19.4	34.9	4.5	CD2	A	E	90	Na 4	口縁屈曲外反、頸部斜め、縦削り
44	甕底部		(12.3)	5.5	AE5	B	B	80	Na28	平底、外面縦削り、摩滅顕著
45	甕	22.5	(13.3)		CE2	A	B	40	Na 2	口縁外反、頸部縦削り底
46	甕	21.2	(30.8)		AE5	A	B	70	Na 2+3	口縁屈曲外反、頸部縦削り
47	甕	20.1	(34.7)		AE5	A	B	40	Na 4+5	口縁外反、頸部縦削りによる段
48	編物石	5個体、長径12.8-16.2×幅5.0-7.7 (cm)								
49	土鏃	長径(3.1)×最大径1.9×孔徑0.6 (cm)、重量7.6g								
50	紡錘車	上径3.85×下径3.0×厚さ1.65、29.9g								

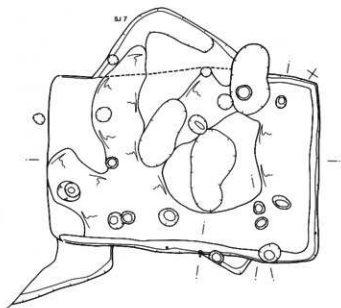
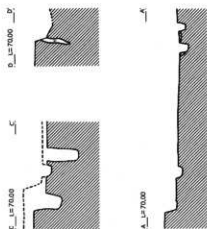
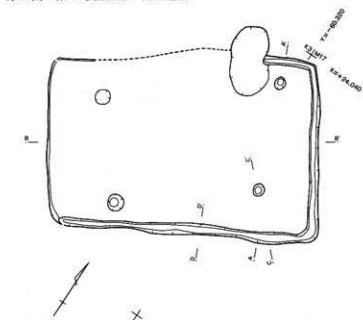
第8号住居跡 (第19回)

本住居跡はK3M17グリッド付近に位置する。第2住居跡群の北端部にあり、本住居跡群の東側は旧河川跡である。新田関係は本住居跡が第15号住居跡を切り、他の住居跡に切られ重複顕著である。

平面形は長方形で、規模は4.35×3.14m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-33°-Wを測る。床面はほぼ平坦で、貼り床は存在しない。掘り方は重複顕著で不

明瞭であるが、略中央部を掘り残し四周を浅く掘り窺めるものである。壁の掘り込みは浅い。壁溝はカマド右から対壁まで巡る。柱穴は4本でP3以外は浅い。柱穴間隔はP1P2が1.70m、P2P3が2.34m、P3P4が1.76m、P1P4が2.84mを測る。カマドは北西壁東隅寄りに設置され、燃焼部底面が残存するのみである。出土遺物は土器以外に編物石が4個体ある。1は混入である。

第19図 第8号住居跡・出土遺物



8.1=70.00

第8号住居跡土層註

- 1 黒褐色 S J 7 埋土、パミス微量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 2 黒褐色 焼土ブロック多量、炭化材多量、ローム、ロームブロック多量

第8号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色 硬質、炭化粒、炭化物少量、焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒子少量

第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高台環		(2.3)	(5.4)	A1	A	E	20	埋土	風化摩滅顯著
2	環	10.5	(2.3)		C1	A	A	10	埋土	後部棒状工具+瓦削り、黒斑
3	環	12.0	(2.8)		A1	A	B	10	埋土	口縁外反、後部ココナテ+瓦削り、摩滅顯著
4	環	11.9	(3.2)		A1	A	E	10	埋土	後部ココナテ+瓦削り
5	環	12.8	(3.5)		A1	A	A	10	埋土	後部ココナテ+瓦削り(未調査)
6	環	13.0	(3.7)		A5	A	B	10	埋土	後部ココナテ+瓦削り
7	甕	17.8	(5.2)		AE5	B	C	10	埋土	口唇直立、頸部以下縦瓦削り、摩滅顯著

第13号住居跡(第21、22図)

本住居跡はK3015グリッド付近に位置する。

第2住居跡群の南端部にあり、本住居跡群の南側は若干の遺構空白域が存在する。新旧関係は、本住居跡が第5、14号住居跡に切られる。

平面形は南東壁がやや湾曲する方形で、規模は7.97×7.93m、深さ35-40cmを測る。

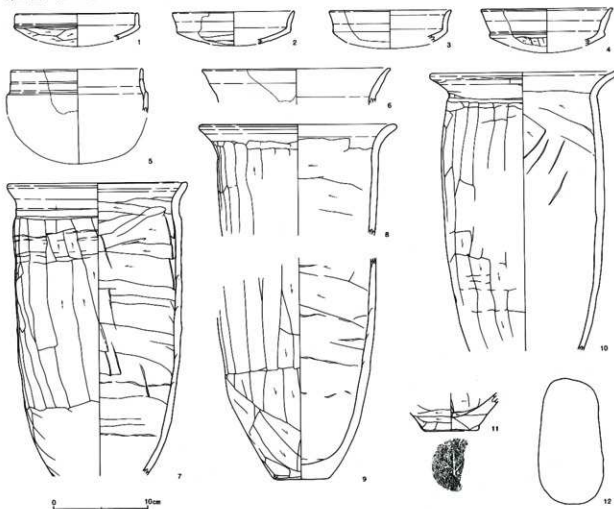
主軸方位はN-10°-Wを測る。

南東壁部分は女堀川による擾乱が及び、壁はほとんど残存していない。

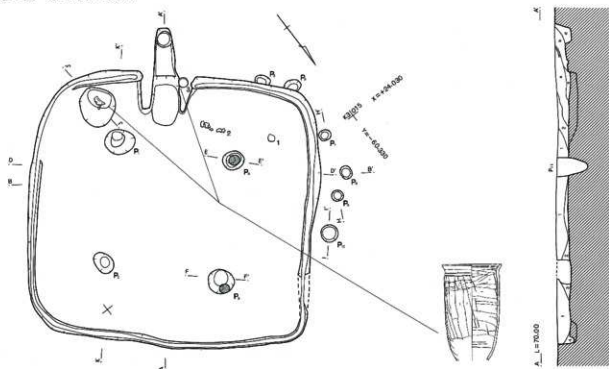
床面は地山直上に構築され、ほぼ平坦である。貼り床は存在しない。掘り方は南東壁付近から中央部分を掘り残し、他の壁下を浅く掘り窪め、北、西隅はさらに掘り下げるものである。

床面出土遺物はカマド右袖部、貯蔵穴内から北西壁下中央部及びカマド対壁中央部にやや集中している。

第20図 第13号住居跡出土遺物



第21図 第13号住居跡(1)



B L=70.00

L=70.00



L=70.00 L=70.00



第13号住居跡貯蔵穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性強、焼土、炭化物微量、ロームブロック多量
- 2 暗褐色シルト 粘性強、ローム粒、ロームブロック大量

第13号住居跡土層註

- 1 黒褐色 焼土、焼土粒少量、白色粒多量、ローム、ロームブロック多量
- 2 黒褐色 焼土少量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- 3 黒褐色 ローム、ローム粒大量
- 4 赤褐色 焼土、炭化物微量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- a 黒褐色 焼土粒、白色粒少量、ローム、ローム粒多量、ロームブロック少量
- b 暗褐色 焼土、焼土ブロック多量、炭化物少量、ローム、ローム粒多量
- c 暗赤褐色 焼土、焼土ブロック多量
- d 暗赤褐色 焼土、焼土粒、焼土ブロック多量

壁はやや傾斜し掘り込みはしっかりしている。

壁溝は南東壁の一部を除いて全周する。北西壁下から南西壁下にかけて壁柱穴状のビットが認められ、位置のみ図示してある。

柱穴は4本で、P1、P2は浅い。P1が径50cm、P2が径32cmを測る。P3は径42cm、深さ50cm、P4は径34cm、深さ55cmを測り、両者とも柱痕跡が検出された。西隔から北西壁にかけて壁外ではあるが、浅い小ビットが6本検出されている。P11、P12は本住居跡よりも新し

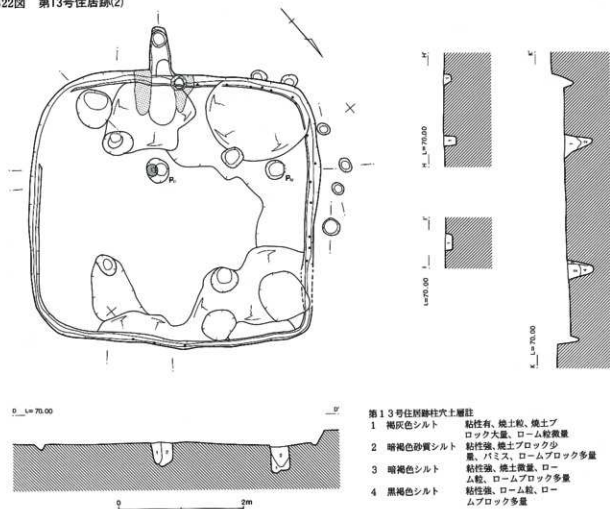
いものである。

柱穴配置はP1が貯蔵穴側にややずれた方形配置をなす。柱穴間隔はP1P2が2.00m、P2P3が1.90m、P3P4が2.10m、P1P4が1.95mを測る。

貯蔵穴はカマドの左側南隔寄りに位置し、楕円形で規模は0.65×0.60m、深さ0.60mを測る。

カマドは南西壁東寄りに設置され、遺存状態は良好である。燃焼部底面は平坦で、焚き口にかけて良く焼けている。規模は1.04×0.36m、深さ0.20mを測る。

第22図 第13号住居跡(2)



第13号住居跡柱穴土層註

- 1 褐色シルト 粘性有、焼土粒、焼土ブロック大量、ローム粒微量
- 2 暗褐色砂質シルト 粘性強、焼土ブロック少量、パミス、ロームブロック多量
- 3 暗褐色シルト 粘性強、焼土微量、ローム粒、ロームブロック多量
- 4 黒褐色シルト 粘性強、ローム粒、ロームブロック多量

燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部はやや短く、壁外に向かって緩く立ち上がる。先端部はビット状に落ち込む。規模は $0.74 \times 0.34\text{m}$ を測る。

袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築され、右袖は

長髪が補強されている。カマド掘り方は明確ではないが略楕円形状を呈し、カマド壁は掘り込まれない。

図示した以外の出土遺物総数は367点で、環形土器118点、高環形土器23点、鬚形土器247点であった。土器以外に編物石1点が出土している。

第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	12.9	(3.9)		A2	A	B	30	埋土	口縁直立、稜部棒状工具+鋭削り
2	環	13.0	(3.9)		A1	A	C	10	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナデ+鋭削り
3	環	12.9	(3.3)		A1	B	C	20	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナデ+鋭削り
4	環	14.0	(4.5)		A1	A	E	10	埋土	器肉厚い、稜部棒状工具+鋭削り
5	環	13.9	(4.7)		A2	A	B	10	埋土	頸部工具ナデ+横鋭削り
6	襲口縁部	19.9	(3.9)		A5	A	B	20	埋土	口縁外反
7	襲	18.9	(30.9)		AE5	A	B	50	カマド、No 1、3	口縁屈曲外反、頸部以下縦鋭削り、輪積み痕
8	襲	21.0	(11.1)		A5	A	A	60	埋土	口縁外反、頸部以下縦鋭削り、輪積み痕
9	襲		(23.5)	6.1	DE5	B	B	60	カマド、No 2	平底、胴部縦鋭削り
10	襲	19.3	(29.5)		AE5	A	B	70	カマド+No 3	口縁屈曲外反、頸部以下縦鋭削り
11	襲底部		(4.0)	5.9	A5	A	B	50	埋土	やや上付底、円環技法か?

第14号住居跡 (第23図)

本住居跡はK301グリッド付近に位置する。

ほとんどカマド煙道部だけの住居跡で、第13号住居跡を切るが、第5号住居跡によって大部分を破壊されている。

平面形は第5、13号住居跡掘り方等による推定復元で方形と考えられる。規模は3.48×3.06m、深さ30cm。

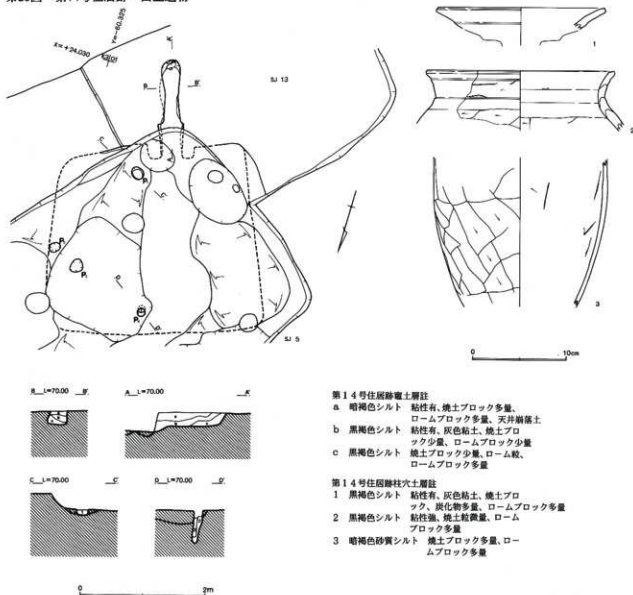
主軸方位はN-163.5°-Eを測る。

壁はカマド壁が一部残存する。床、壁溝等是不明である。貯蔵穴は存在しない。

柱穴はP1、P4の2本で、P2、P3は伴うが浅い。柱穴間隔はP1P4が2.20mを測る。

カマドは南壁西寄りに設置され、煙道部が残存するのみで、先端部から菱形土器片が出土している。

第23図 第14号住居跡・出土遺物



第14号住居跡出土層註

- a 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック多量、ロームブロック多量、天井崩落土
- b 黒褐色シルト 粘性有、灰色粘土、焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- c 黒褐色シルト 焼土ブロック少量、ローム粒、ロームブロック多量

第14号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、灰色粘土、焼土ブロック、炭化物多量、ロームブロック多量
- 2 黒褐色シルト 粘性強、焼土粒微量、ロームブロック多量
- 3 暗褐色砂質シルト 焼土ブロック多量、ロームブロック多量

第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高 坏	17.5	(2.3)		A1	A	B	20	カマド	器肉厚い、口唇沈線
2	斐口縁部	19.8	(6.5)		E5	B	F	20	№2	口縁外反、頸部横覧りによる段
3	斐胴部		(15.9)		DE2	B	F	50	№1+2	胴部斜め底開り

第15号住居跡 (第24、26図)

本住居跡はK3N16グリッド付近に位置する。

第2住居跡群のほぼ中央部にあり、本住居跡カマドの東側は女堀川堤防となる。本住居跡が第5号住居跡に切られるが、他の重複する住居跡を切っている。

平面形はほぼ方形で、規模は4.46×4.44m、深さ35~40cmを測る。主軸方位はN-115.5'-Eを測る。

床面はほぼ平坦である。貼り床は存在しない。掘り方はカマド前方から中央部を掘り残し、他の部分を浅く掘り窪めるものである。

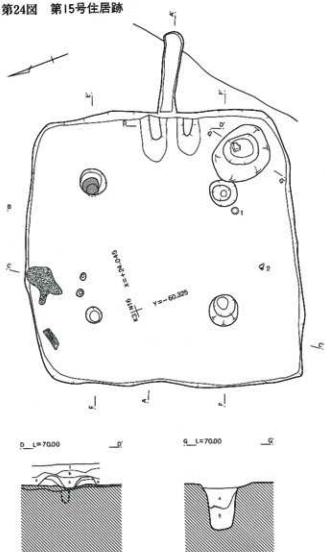
壁の掘り込みはしっかりしており壁溝は存在しない。

貯蔵穴はカマド右側、2段に掘り込まれる。

柱穴は4本で、P1は柱痕跡が検出された。柱穴配置は方形でP4が貯蔵穴と接する。柱穴間隔はP1P2が2.04m、P2P3が2.10m、P3P4が1.76m、P1P4が2.10mを測る。

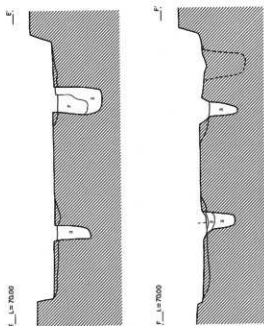
カマドは西壁やや南寄り、燃焼部底面は良く焼けている。中央部に支脚穴がある。規模は0.80×0.40m、深さ0.35mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。煙道部底面はほぼ平坦で、規模は1.30×0.44mを測る。軸部は暗灰褐色粘土と黒褐色土を主体にして構築される。

第24図 第15号住居跡



第15号住居跡貯蔵穴土層註

- 4 黒褐色粘土質シルト 粘性強、焼土、炭化物多量、ロームブロック少量
- 5 黒褐色シルト 粘性有、砂少量、ローム少量



第15号住居跡土層註

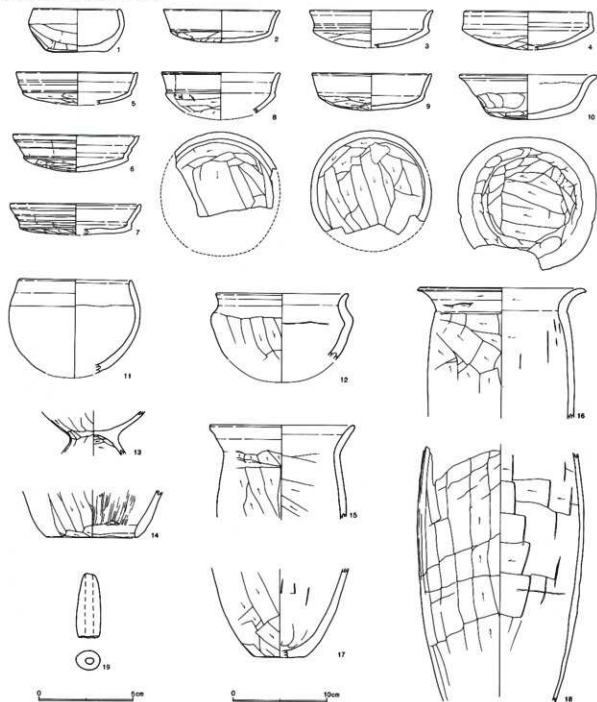
- 1 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、炭化物微量
- a 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、パミス微量、ロームブロック多量
- b 暗褐色シルト 粘性有、黄褐色細粒砂多量、焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- c 暗褐色シルト 粘性有、黄褐色細粒砂多量、焼土ブロック多量、ロームブロック微量

第15号住居跡柱穴土層註

- 1 暗褐色シルト 粘性強、焼土ブロック少量、パミス少量、ローム粒、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック、炭化物、パミス、ロームブロック少量
- 3 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック、パミス少量、暗褐色細粒砂少量、ローム粒、ロームブロック少量

0 2m

第25図 第15号住居跡出土遺物



第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	碗	9.1	4.6		E2	A	B	80	No. 1	器肉厚い、稜部+觥削り+指痕ナテ
2	杯	12.4	3.5		A1	A	A	20	床下	口唇沈線、稜部棒状工具+觥削り(合未調)
3	杯	13.1	(4.0)		A1	B	C	25	床下	器肉厚い、稜部棒状工具+觥削り
4	杯	13.0	(4.1)		A1	A	B	40	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナテ+觥削り
5	杯	13.0	(3.5)		AD1	A	A	20	埋土	口唇平坦段部工具ナテ稜部工具ナテ+觥削り
6	杯	13.4	3.9		A1	A	A	40	埋土	口唇直立段部工具ナテ稜部工具ナテ+觥削り
7	杯	14.0	(3.3)		A1	A	B	25	埋土	口唇直立段部工具ナテ稜部工具ナテ+觥削り

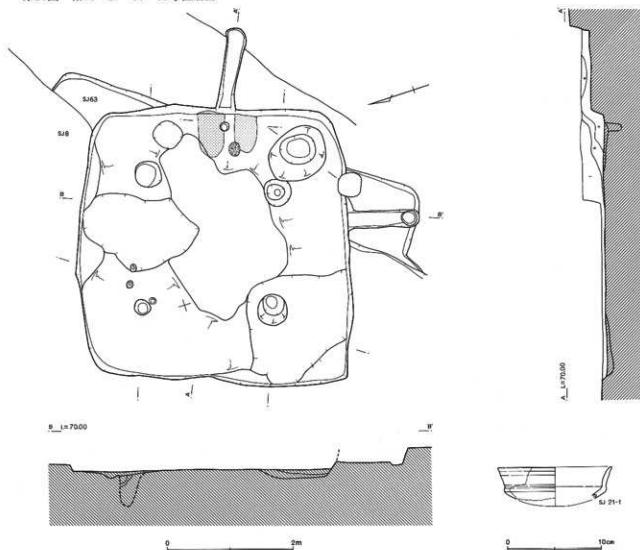
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	坏	12.6	(5.3)		AD1	B	B	50	埋土	後部ヨコナデ+寛削り、二次加熱?
9	坏	12.8	3.9		AD1	B	A	80	床下	口唇肥厚、後部棒状工具+寛削り
10	坏	22.0	4.8		E5	B	A	90	床直	口縁外反、後部指頭ナデ、底面寛削り、黒斑
11	鉢	11.8	(10.2)		A1	A	B	70	埋土	砂質、頸部以下寛削り後ナデ? 黒斑
12	柄	14.0	(7.0)		E5	A	A	20	埋土	器内厚い、頸部以下縦覧削り
13	高坏?		(4.9)		A1	B	B	60	Na.2	坏部内面黒色
14	甗		(5.1)	10.1	A5	B	B	10	カマド	単孔大形、頸部尖る
15	甗	15.2	(9.9)		A5	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦覧削り
16	甗	18.0	(13.9)		CE2	A	B	40	Na.1	口縁外反、頸部横覧削りによる段
17	甗底部		(9.4)	5.6	E5	A	B	30	カマド	底面寛削り、外面粘土付着
18	甗胴部		(26.6)		CE2	A	B	70	カマド	外面縦覧削り、黒斑
19	土 鏝	長径(3.4)×最大径1.25×孔径0.5 (cm)、重量4g								

第21号住居跡 (第26図)

カマド煙道部だけの住居跡で、第39号住居跡を切るが、第15号住居跡によって大部分を破壊されて平面形

は不明である。煙道部先端はビット状(径26cm)に掘り込まれる。規模は1.14×0.28m、深さ25cm。主軸方位はN-164.5°-Wを測る。

第26図 第15・21・39・63号住居跡



第28号住居跡 (第26図)

重複顕著でかろうじて南東隅部分が残存した住居跡である。第5、15号住居跡によって切られる。第14号住居跡との新旧関係は不明である。

規模は現状で1.34×1.10m、深さ20cmを測る。長軸方向はN-64°-Eを測る。

床は地山直上で、ほぼ平坦。出土遺物はない。

第63号住居跡 (第19図)

重複顕著でかろうじて北東隅から西側床面部分が残存した住居跡である。第8、15号住居跡によって切られる。第16、30号住居跡との関係は不明である。

規模は現状で7.97×7.93m、深さ35~40cm。長軸方向はN-10°-Wを測る。

第16号住居跡 (第28図)

本住居跡はK3N16グリッド付近に位置する。

第2住居跡群の西端部にあり、本住居跡の南側は細長く遺構空白域が存在する。新旧関係は、本住居跡が

第30、156号住居跡を切り、第5、15号住居跡によって切られる。

平面形は南側が重複により不明であるが、略長方形と考えられ、規模は現状で4.24×4.24m、深さ20cmを測る。長軸方向はN-23.5°-Wを測る。

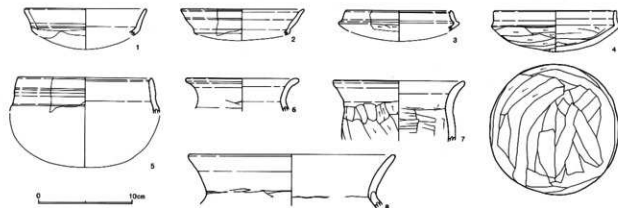
床面はほぼ平坦で、掘り方埋め戻し土上に構築される。掘り方は中央部を掘り残し、他の部分を浅く掘り窪めるものである。貼り床は存在しない。

壁はやや傾斜する。壁溝は認められなかった。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴は2本で、重複する住居跡の相当する部分に柱穴は検出できなかった。北壁中央部に3本の小ピットが存在する。P1が径32cm、深さ26cm、P2が径37cm、深さ56cm、P3が径30cm、深さ46cmを測り、P4(径27cm)、P5(径20cm)は浅い。P2、P3は柱痕跡が検出された。主柱穴配置は直線状である。柱穴間隔はP1P2が1.48mを測る。

カマドは南壁に設置されたと考えられる。

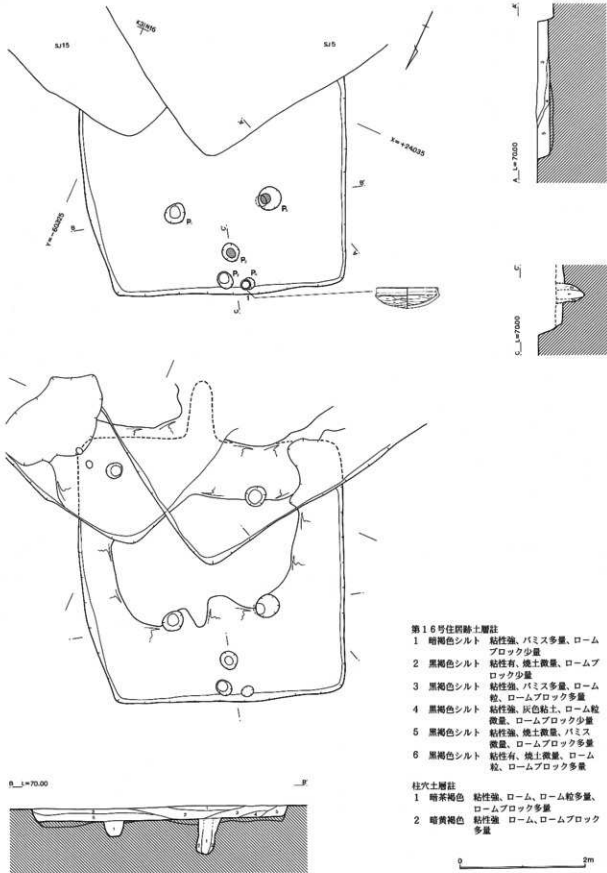
第27図 第16号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	12.9	(3.0)		D1	A	B	60	掘り方	口縁外反、稜部棒状工具?+鑑削り
2	環	13.1	(2.7)		A1	A	B	10	埋土	段部ヨコナデ、稜部棒状工具?+鑑削り
3	環	11.2	(1.65)		A1	A	B	10	埋土	口唇沈線、稜部棒状工具+鑑削り
4	環	12.8	4.3		A1	A	B	95	No.1	口縁部直立、稜部ヨコナデ+鑑削り
5	環	14.1	(3.7)		A2	A	B	10	埋土	口唇沈線、段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ
6	小形甕	11.6	(3.5)		A2	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部鑑削りによる段
7	甕	13.7	(6.4)		AE2	A	B	20	掘り方	口縁外反、頸部以下縦鑑削り
8	甕	21.9	(5.6)		AD6	A	A	25	埋土	口縁外傾、頸部横鑑削り

第28図 第16号住居跡



第16号住居跡土層註

- 1 暗褐色シルト 粘性強、パミス多量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 粘性有、焼土微量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色シルト 粘性強、パミス多量、ローム粒、ロームブロック多量
- 4 黒褐色シルト 粘性強、灰色粘土、ローム粒微量、ロームブロック少量
- 5 黒褐色シルト 粘性強、焼土微量、パミス微量、ロームブロック多量
- 6 黒褐色シルト 粘性有、焼土微量、ローム粒、ロームブロック多量

柱穴土層註

- 1 暗茶褐色 粘性強、ローム、ローム粒多量、ロームブロック多量
- 2 暗黄褐色 粘性強、ローム、ロームブロック多量

第30号住居跡 (第68図)

本住居跡はK3M16グリッド付近に位置する。

重複顕著により床の硬質面のみが検出できた住居跡である。第7、16、23、40号住居跡によって切られ、大部分が破壊されている。

平面形は硬質面の範囲による推定復元では、略方形と考えられる。規模は現状で3.60×3.45mを測る。主軸方位はN-131.5°-Wを測る。

柱穴は3本でいずれも浅い。

出土遺物は埋土中から甕が3点出土した。

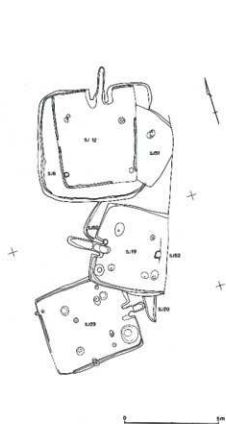
3. 第3住居跡群

第6号住居跡 (第31、32図)

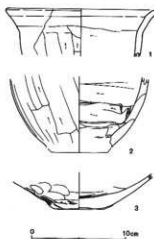
本住居跡はK3J18グリッド付近に位置する。

第3住居跡群の北端部にあり、以北は住居跡はなく桑里坪境界溝まで遺構空白域が存在する。東側は旧河

第30図 第3・4住居跡群

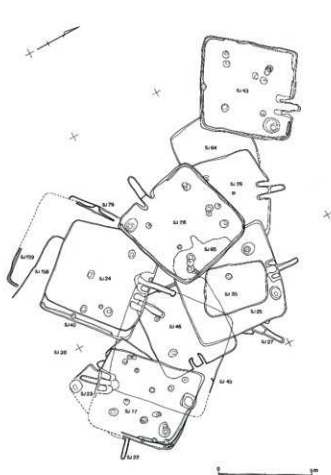


第29図 第30号住居跡出土遺物



川跡によって擾乱を受ける。新旧関係は、本住居跡が第12、51、52号住居跡を切り、第19号住居跡とはかろうじて間隔があり、重複しない。

平面形はカマド壁が斜行する方で、規模は6.24×



6.08m、深さ36cmを測る。

主軸方位はN-20°-Eを測る。

東壁部分は旧河川跡による攪乱が及び、壁はほとんど残存していない。

床面は地山直上に構築されおぼ平坦。貼り床、掘り方は存在しない。

床面出土遺物はカマドから右袖周辺部に比較的多くまわっている。

壁はおぼ直立し、遺存状態が良好で掘り込みはしっかりしている。

壁溝は東壁及び南西隅部を除いて全周する。西壁下から南壁下にかけて壁柱穴状のビットが認められた。間隔がおぼ一定で平均28cmを測る。

第32図には位置のみ黒丸で図示してある。

主柱穴は4本で、P1が径26cm、深さ68cm、P3が径30cm、深さ34cm、P4は径25cm、深さ80cm、P5は径34cm、深さ20cmを測る。P4、P5は柱痕跡が検出された。P5は浅い。P6は西壁から延びる間仕切状の浅い2条

の溝の延長上に位置する。

柱穴配置は整った方形配置をなす。柱穴間隔はP1P3が2.95m、P3P4が3.42m、P4P5が2.69m、P1P5が2.83mを測る。

貯蔵穴は存在しない。

カマドは北壁のおぼ中央部に設置され、遺存状態が良好で天井部が一部残存していた。燃焼部底面は平坦で、焚き口にかけて良く焼けている。規模は0.97×0.50m、深さ0.45mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部は壁外に向かって緩く立ち上がり、先端部はビット状(径20cm)に落ち込む。規模は1.10×0.32mを測る。

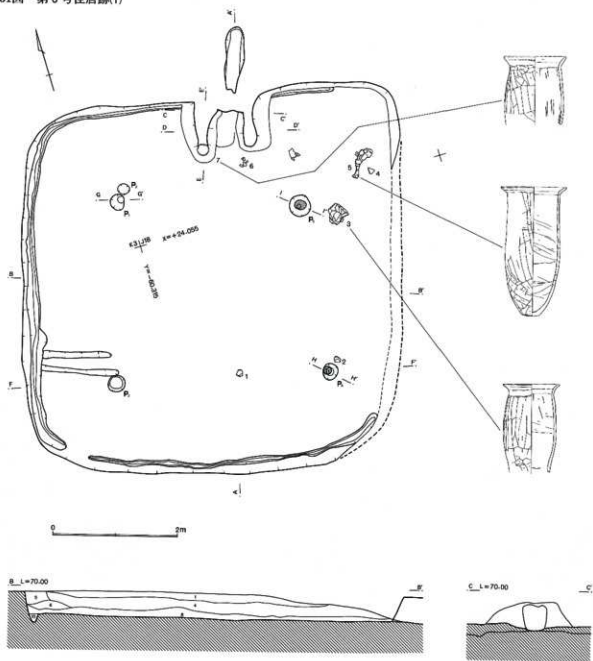
袖部は暗褐色土と褐色土を主体にして構築され、左袖先端部は長襖が補強されている。カマド掘り方は明確ではないが、カマド壁は掘り込まれない。

環形土器は総数959点で、口縁部が229点、体部が730点、鉢形土器口縁部が1点である。高環形土器は総数32



▲第6号住居跡カマド出土状態

第31図 第6号住居跡(1)



第6号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性強、焼土粒少量、炭化物微量、ローム少量
- 2 暗褐色シルト 粘性有、炭化物少量、ローム、ロームブロック多量
- 3 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、ローム粒、ロームブロック多量

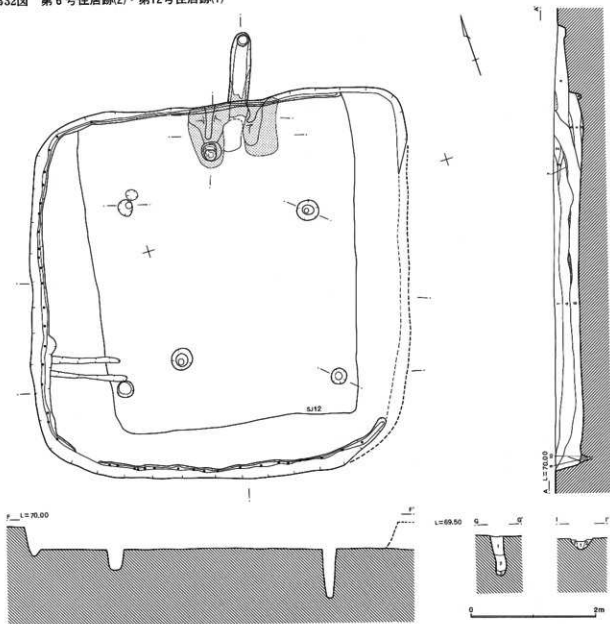
点で、坏口縁部が20点、脚部が12点である。変形土器は総数1,505点で、口縁部が107点、胴部が1,361点、底部が37点である。甗形土器は胴部が3点出土した。

土器以外の出土遺物では、土鏝が1点、編物石が9個体、貝巣穴底泥岩が16個体(総重量39.8g)出土し

ている。

編物石の計測値は、長径10.2~17.2cm、幅5.1~7.5cm、重量325~680g範囲に収まり、少なくとも大小の別がある。

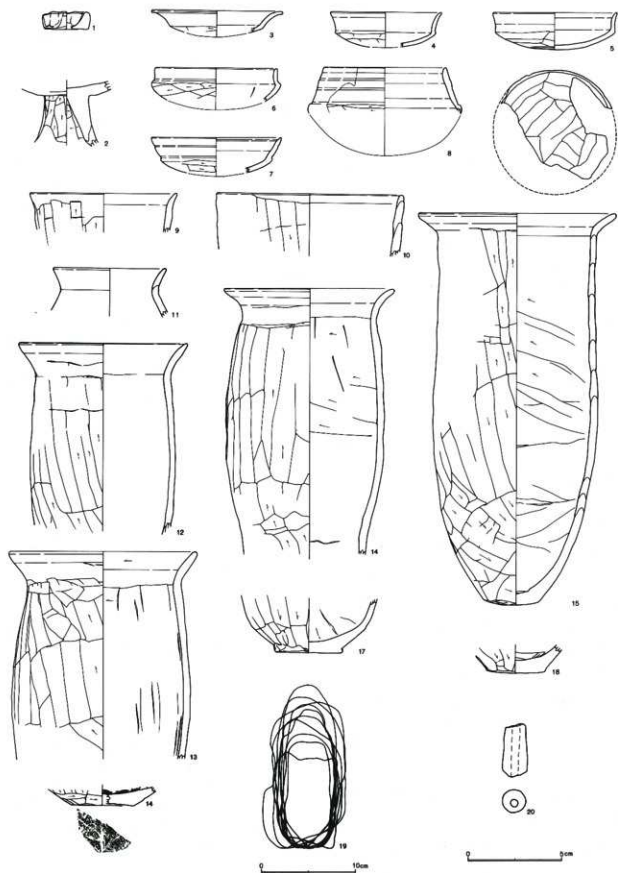
第32図 第6号住居跡(2)・第12号住居跡(1)



第6号住居跡土層註

- | | | | |
|------------|----------------------------------|----------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色シルト | 粘性有、焼土ブロック微量、
ローム粒子、ロームブロック少量 | a 黒褐色シルト | 粘性強、灰色粘土、焼土少量、
炭化物微量、ローム粒少量 |
| 2 黒褐色シルト | 粘性強、炭化物少量、パミス微量、
灰色粘土 | b 黒褐色シルト | 粘性有、焼土ブロック大量、
炭化物少量、ローム粒少量 |
| 3 黒褐色シルト | 粘性有、炭化材微量、パミス微量、
シルト質砂多量 | c 黒褐色シルト | 粘土質、焼土粒、焼土ブロック、
炭化物少量、黄褐色細粒砂微量 |
| 4 黒褐色シルト | 粘性有、焼土微量、炭化物少量、
ロームブロック少量 | d 暗褐色シルト | 砂質、焼土ブロック、炭化物多量、
中粒砂少量 |
| 5 黒褐色シルト | 粘性強、焼土ブロック微量、
炭化物微量、ローム粒少量 | e 黒褐色シルト | 粘土質、焼土粒、炭化物粒少量 |
| 6 黒褐色砂質シルト | 粘性強、焼土粒、炭化材少量、
ローム粒、ロームブロック多量 | f 暗褐色シルト | 砂質、焼土ブロック少量、パミス微量、
中粒砂多量 |
| 7 黒褐色シルト | 粘性有、焼土粒微量、シルト質砂多量 | g 黒褐色シルト | 砂質、焼土粒、焼土ブロック少量、砂多量 |
| 8 黒褐色シルト | 焼土粒微量、炭化物少量、シルト質砂多量 | h 褐色シルト | 砂質、焼土粒微量 |
| 9 黒褐色シルト | 壁材の痕跡? 焼土、炭化材、ロームブロック混在 | i 暗褐色シルト | 砂質、粘性有、焼土ブロック少量、
パミス微量、中粒砂多量 |
| 10 黒褐色シルト | 粘性有、焼土ブロック少量、ローム粒、
ロームブロック多量 | j 褐色シルト | 砂質、焼土粒微量 |
| | | k 黒褐色シルト | 粘性強、焼土粒少量、炭化物、
細粒砂、ローム微量 |

第33图 第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	手づくね		(1.9)		4.5	A1	A B	30	埋土	口縁部極厚く底部器肉極薄い
2	高環		(7.0)			A1	A B	50	埋土	砂質、外面縦、内面横篋削り
3	環	14.0	(3.0)			A1	A B	40	埋土	口唇部厚外反、稜部ヨコナテ+篋削り
4	環	11.8	(3.7)			A1	A C	30	埋土	口唇部厚、稜部棒状工具+篋削り
5	環	13.0	4.0			A1	A B	50	埋土	口唇外反、稜部ヨコナテ+篋削り、黒斑
6	環	13.0	(4.4)			AC1	A E	30	埋土	稜部棒状工具+篋削り
7	環	13.8	(4.1)			A1	A B	10	埋土	段部沈線、稜部棒状工具+篋削り、黒斑
8	環	13.0	(5.0)			C1	A A	25	埋土	段部沈線、稜部棒状工具
9	鉢	15.6	(4.2)			E5	A B	25	埋土	頸部以下縦篋削り、輪横み肉
10	鉢	19.8	(6.6)			E5	A E	10	埋土	外面縦篋削り、輪横み肉、器肉厚い
11	小形甕	12.0	(5.1)			AES	B B	10	埋土	頸部以下縦篋削り、摩滅顕著
12	甕	18.0	(20.1)			E5	A B	40	Na7	口縁外反、頸部以下縦篋削り
13	甕	19.9	(21.9)			E5	B B	50	カマド	口縁外反、頸部以下縦篋削り、黒斑二次加熱
14	甕	18.1	(30.0)	6.7		E5	B A	70	Na3	口縁やや屈曲外反、頸部以下縦篋削り、黒斑
15	甕	23.3	41.5	5.5		E5	A A	40	Na5	口縁外折、頸部以下縦篋削り
16	甕底部		(2.1)	6.7		E5	B B	50	埋土	やや上げ底、底面木葉痕、黒斑
17	甕底部		(5.9)	7.0		A2	A B	50	Na1	凸出平底、篋削り
18	甕底部		(2.9)	6.2		E5	B	70	Na2	平底篋削り、器肉厚い
20	土鏝	長径(2.8)×最大径1.3×孔径0.35(cm)、重量5.1g								

第12号住居跡(第34図)

本住居跡はK3J18グリッド付近に位置する。

第6号住居跡と北壁を共有し、入れ子状に検出されたため、同住居跡は本住居跡の拡張と考えられる。

新旧関係は、本住居跡が第51号住居跡を切る。

平面形は北壁が長く、南壁が短い台形状で、規模は5.16×4.48mを測る。

主軸方位はN-20°-Eを測る。

東壁部分には田河川跡による攪乱が及び、壁は一部不明確である。

床面は全体に硬質で地山直上に構築され、ほぼ平坦である。掘り方、貼り床は存在しない。

壁は残存する部分ではほぼ直立する。壁溝は東壁中央部と各壁の一部を除いて設置される。南西隅から南壁にかけて、疎らであるが壁柱穴状の小ピットが認められた。

柱穴は9本と多数検出されている。P2、P6、P7が深く、他はやや浅い。西半部の柱穴は接近するものが多く、P2とP3の2本、P4とP5とP6の3本が至近距離にある。各柱穴の法量は、P1が径32cm、P2が径24cm、深さ73cm、P3が径32cm、深さ34cm、P4が径34

cm、P5が径42cm、深さ32cm、P6が径46cm、深さ76cm、P7が径32cm、深さ67cm、P8が径32cm、深さ33cm、P9が径25cmを測る。

P7、P8は柱痕跡が検出された。

柱穴配置はP1、P7が棟上であり、他は概ね台形状に配置される。柱穴間隔はP1P7が2.44m、P2P6が2.99m、P3P5が2.39m、P6P8が1.87m、P8P9が2.79m、P2P9が2.64mを測る。

カマドは不明であるが、第6号住居跡と同じ北壁に設置されていた可能性が強い。

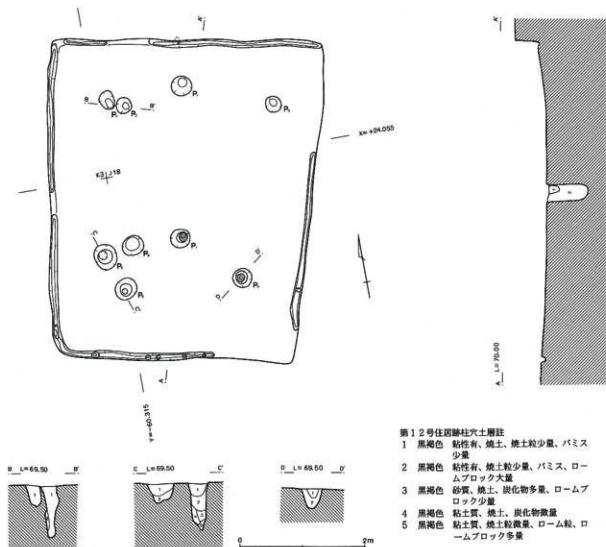
図示した以外の出土遺物総数は402点で、環形土器54点、高環形土器4点、甕形土器353点、甕形土器1点であった。

環形土器は口縁部が外反するもの、内傾するもの、有段口縁のものがあがり、稜部の造出は横撫で後篋削りするものと工具乃至棒状工具を併用するものがある。その他やや粗製で体部が深い碗状のものもある。

高環形土器脚部は、須恵器長脚高環の模倣で端部が鋭く沈線状で、胎土も精選されている。

土器以外に編物石1点、土鏝が2点、大形のものと小形のものが出土している。

第34図 第12号住居跡(2)



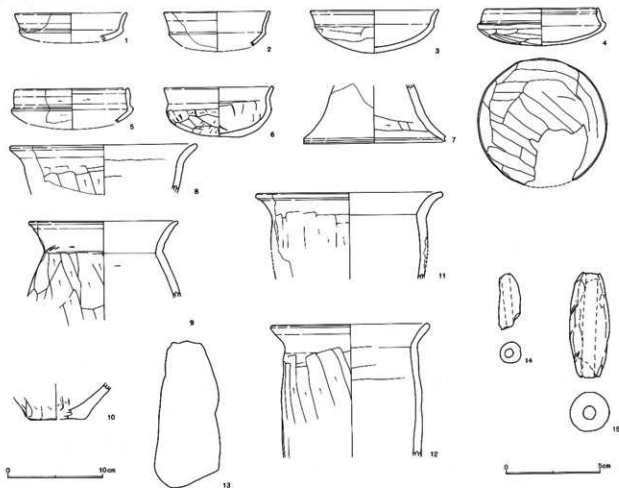
第12号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色 粘性有、焼土、焼土粒少量、パミス少量
- 2 黒褐色 粘性有、焼土粒少量、パミス、ロームブロック大量
- 3 黒褐色 砂質、焼土、炭化物多量、ロームブロック少量
- 4 黒褐色 粘土質、焼土、炭化物微量
- 5 黒褐色 粘土質、焼土粒微量、ローム粒、ロームブロック多量

第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	11.9	(3.2)		A1	B	C	10	埋土	器内厚い、縁部コナテ+鑑削り
2	環	11.1	(3.7)		A1	A	C	10	No.1	役部コナテ、縁部棒状工具+鑑削り
3	環	13.6	4.5		A1	B	B	30	埋土	器内厚い、縁部コナテ+鑑削り、内面黒色
4	環	12.0	4.0		A1	A	B	90	埋土	口唇凹縁、縁部棒状工具+鑑削り
5	環	4.0	(3.6)		A1	A	B	10	埋土	口縁直立、縁部工具ナテ+鑑削り
6	環	11.6	5.3		E5	B	A	90	埋土	口縁外反、体部鑑削り+指頭ナテ
7	高環		(6.1)	15.0	A1	A	B	25	埋土	口唇直立、内面鑑削り
8	鉢	19.5	(5.3)		AD2	A	B	20	埋土	口縁部外反、頸部縦鑑削り
9	鉢	16.0	(8.1)		E1	A	B	20	埋土	口縁部曲外反、頸部縦鑑削り
10	甕底部		(3.8)	6.2	E2	A	B	70	埋土	底面凹凸円環技法か?
11	甕	20.0	(9.3)		CE2	A	B	30	埋土	口縁外反、頸部以下縦鑑削り、輪積み底
12	甕	11.0	(14.1)		AE5	A	B	30	No.1	口縁外反、頸部以下縦鑑削り、輪積み底
14	土 錘	長径(2.8)×最大径1.1×孔径0.45(cm)、重量2.6g								
15	土 錘	長径5.5×最大径2.1×孔径0.7(cm)、重量19.6g								

第35図 第12号住居跡出土遺物



第19号住居跡 (第36、37図)

本住居跡は K3K~L18 グリッド付近に位置する。

第3住居跡群のほぼ中央部にあり、西側は第4、5住居跡群との間に遺構空白域が存在する。

新旧関係は、本住居跡が周辺部分の全ての住居跡を切っており最も新しい。東壁は旧河川跡によって擾乱を受け残存していない。

平面形は方形乃至長方形と考えられる。規模は4.60×4.28m、深さ58cmを測る。

主軸方位は N-55°-E を測る。

床面は掘り方埋め戻し土上に構築され、ほぼ平坦である。貼り床は検出できなかった。

掘り方は概ねカマド前方から中央部を掘り残し、他の部分を浅く掘り窪めるものである。

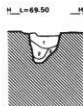
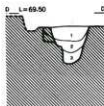
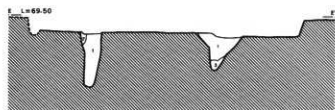
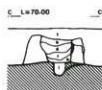
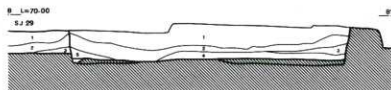
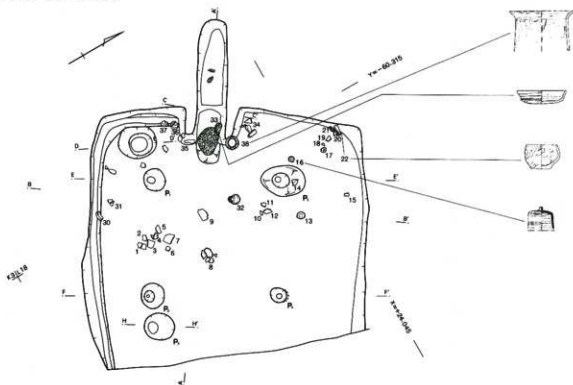
出土遺物はカマド周辺部、四柱穴内及び北西隅に比

較的集中している。

壁は比較的遺存状態がよく、ほぼ直立し掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド左袖部分から南壁下に設置され、カマドから北半部には検出されなかった。全体にやや幅広いが、掘り込みはしっかりしている。

柱穴は5本で、P2、P3が接近する。P4以外はいずれも大形である。深さはP3がやや浅いが、他は深い掘り込みを持つ。各柱穴の法量はP1が径34cm、深さ85cm、P2が径40cm、深さ72cm、P3が径52×41cmの楕円形で深さ50cm、P4が径26cm、深さ64cm、P5が径73×47cmの楕円形で深さ60cmを測る。P2、P5は中心部が更に掘り込まれる。径はP2が径17cm、P5が径28cmを測る。掘り方内部から、P1に切られる小ビットが検出されている。



0 2m

第19号住居跡土層註

- 1 黒褐色 焼土、焼土粒多量、白粒多量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 1層近似、炭化物少量
- 3 暗褐色 焼土、焼土粒多量、白粒多量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- 4 暗褐色 焼土粒多量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- 5 暗褐色 ローム、ローム粒多量

- a 黒褐色 焼土、焼土ブロック多量、炭化物粒、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- b 暗褐色 3層近似、焼土、焼土粒多量、炭化物粒、炭化物多量、ローム、ローム粒多量、ロームブロック少量
- c 暗褐色 焼土、焼土ブロック少量
- d 暗褐色 粘性有、ローム、ローム粒多量
- e 暗褐色 砂質、暗灰褐色粘土多量、焼土、焼土粒多量、炭化物多量
- f 黒褐色 暗灰褐色砂、焼土、焼土粒、焼土ブロック多量、ローム、ローム粒多量
- g 暗赤褐色 砂質、焼土、焼土粒多量
- h 黒褐色 粘性強、ローム、ローム粒多量
- i 黒灰色 焼土多量、炭化物多量

柱穴配置はややカマド寄りに方形乃至台形状に配置される。柱穴間隔は P1P2 が1.84m、P2P4 が2.09m、P3P4 が2.09m、P4P5 が1.85m、P1P5 が2.04mを測る。

貯蔵穴はカマド左側の南西隅寄りにあり、壁溝に接する。楕円形で2段に掘り込まれる。規模は上部が0.6×0.5m、深さ0.3m、下部が径0.28mの円形で、深さ0.27mを測る。

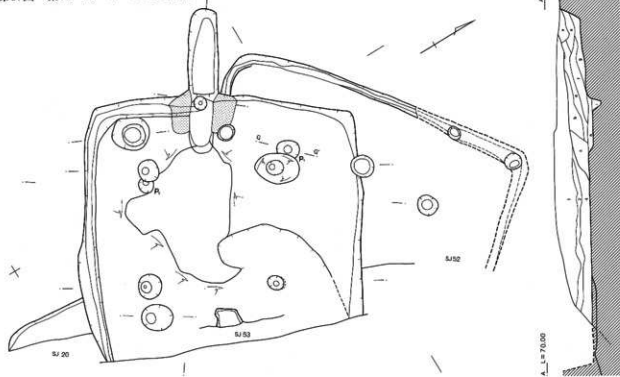
カマドは西壁僅かに南寄りに設置される。遺存状態は良好である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて略楕円形に掘り込まれる。箱形と考えられ、規模は1.20×0.55m、深さ0.58mを測る。奥壁中央部から支脚穴が(径21cm、深さ15cm)検出された。燃焼部奥壁から僅かな段をなし煙道部へ移行する。

煙道部は深く45cmを測り、天井部が良好に遺存していたが、先端部煙出し口は不明瞭であった。底面は壁外に向かって緩く傾斜し、規模は1.37×0.50mを測る。

袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築され、右袖は長襷が先端部に補強されている。カマド壁は両袖部分及び燃焼部奥壁(楕円形状、径0.87×0.40m)が僅かに掘り込まれる程度である。

図示した以外の出土遺物総数は1560点で、環形土器451点、高環形土器38点、甕形土器1072点、甕形土器2点であった。須恵器はほぼ完形で埋土層からの出土である。その他土錘1個体、貝巢穴痕泥岩が8個体(総重量13.2g)出土している。縄物石は33個体が出土している。

第37図 第19・20・52・53号住居跡



G₁=69.50



第19号住居跡貯蔵穴土層註

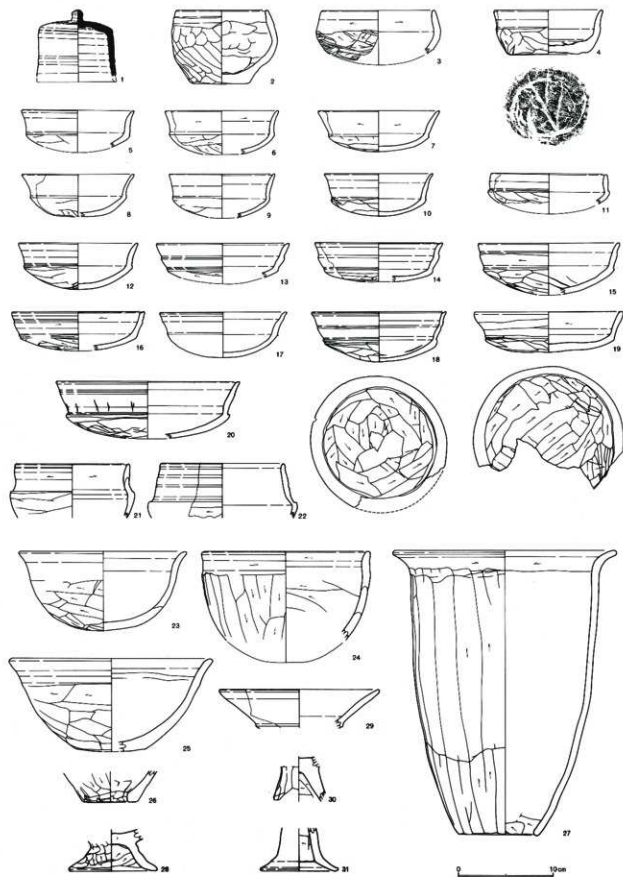
- 1 黒褐色 焼土、焼土粒多量、焼土ブロック少量、炭化物少量、ローム、ローム粒多量
- 2 黒褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 3 暗褐色 灰褐色粘土多量、炭化物多量、ローム、ローム粒、ロームブロック少量

第19号住居跡柱穴土層註

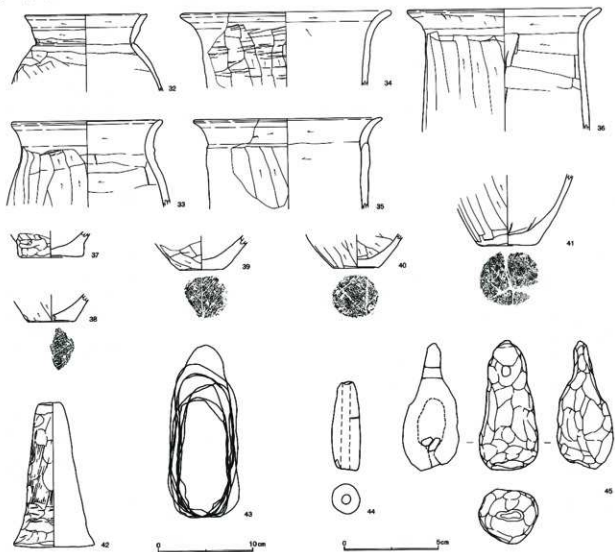
- 1 黒褐色 粘性有、焼土、焼土粒少量、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
- 2 黒褐色 焼土、炭化物少量、ローム、ローム粒多量
- 3 暗褐色 灰褐色粘土、炭化物多量、ロームブロック少量

0 3m

第38图 第19号住居跡出土遺物(1)



第39図 第19号住居跡出土遺物(2)



第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	(8.4)	(7.0)		F1	A	H	70	Na16	ロクロ左?回転
2	柄	9.6	7.9	6.4	D2	A	B	80	Na13	平底、腰部指頭ナデ、黒斑
3	環	11.7	(4.5)		E5	A	A	30	埋土	口縁内反、腰部ヨコナデ+笥削り、黒斑
4	環	11.4	4.7		A1	A	B	50	埋土	平底、底面木葉状、腰部指頭ナデ、黒斑
5	環	11.9	(3.9)		A1	A	C	25	埋土	口唇やや肥厚、腰部棒状工具+笥削り
6	環	12.0	(4.7)		A1	A	B	20	埋土	口縁外反、腰部ヨコナデ+笥削り
7	環	12.9	4.3		AE1	A	C	25	No 8	口縁外反、腰部ヨコナデ+笥削り
8	環	11.8	4.5		A1	A	B	20	埋土	口縁外反、腰部ヨコナデ+笥削り、二次加熱
9	環	11.4	(4.7)		A1	A	C	80	貯蔵穴+Na36	口縁ヨコナデ、腰部ヨコナデ+笥削り
10	環	11.6	4.4		A1	A	B	50	埋土	口縁ヨコナデ、腰部ヨコナデ+笥削り、黒斑
11	環	12.2	(3.2)		C1	A	B	20	埋土	口縁肥厚、腰部棒状工具+笥削り
12	環	12.8	4.9		A1	A	B	50	埋土	口縁工具ナデ、腰部工具ナデ+笥削り
13	環	14.2	(3.6)		CE1	A	C	20	埋土	段部棒状工具、腰部棒状工具+笥削り
14	環	13.5	(4.3)		E2	A	C	20	埋土	口唇凹縮段部工具ナデ腰部棒状工具+笥削り
15	環	14.9	(5.6)		AE2	A	B	60	Na14	段部工具ナデ、腰部工具ナデ+笥削り
16	環	14.2	(4.2)		CE1	A	F	50	埋土	口唇沈線、段部沈線、腰部棒状工具+笥削り
17	環	13.0	4.8		A1	A	E	70	埋土	段部ヨコナデ、腰部棒状工具+笥削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
18	環	14.4	5.3		CE1	A	B	80	No31	段部棒状工具、稜部棒状工具+笥削り
19	環	15.8	4.2		CE1	A	B	70	No33	口縁肥厚、稜部工具ナテ+笥削り
20	環	19.4	(6.1)		CE1	A	F	30	カマド	段部沈線、稜部棒状工具+笥削り
21	環	11.9	(5.6)		A1	A	B	30	埋土	口縁肥厚直立、頸部工具ナテ+笥削り
22	環	13.1	(5.8)		A1	A	F	10	埋土	段部沈線、稜部棒状工具+笥削り
23	鉢	17.5	8.5		DE5	B	B	30	埋土	口縁外反、体部縦笥削り、器内厚い
24	鉢	17.5	(9.3)		E5	A	B	50	埋土	口縁直立、器内厚い
25	鉢	21.2	(10.0)		E5	B	B	60	埋土	平底、稜部ヨコナテ+笥削り、二次加熱
26	甌底部		(3.3)	6.0	A1	A	A	50	埋土	小形半孔、胴部縦笥削り
27	甌	23.3	30.1	8.6	A5	A	B	80	埋土上層	大形半孔、頸部以下縦笥削り
28	脚部		(4.5)	9.1	E5	A	B	80	No17	小形台付き変脚部、器内厚い
29	高杯脚部	16.9	(4.1)		A1	A	B	20	カマド	器内厚い、稜部ヨコナテ+笥削り、摩滅顯著
30	高杯脚部		(3.7)		AD1	A	B	70	埋土	内面笥削り
31	高杯脚部		(4.7)	8.1	A1	A	B	25	埋土	裾部短い、内面笥削り
32	小形壺	12.8	(8.3)		CE2	B	F	60	No32	口縁平坦、口縁有段、頸部以下縦笥削り
33	甕	15.7	(9.3)		DE5	A	B	30	カマド	口縁外反、頸部以下縦笥削り、器内厚い
34	甌	21.7	(8.0)		E5	B	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦笥削り、内面平滑
35	甕	19.7	(9.6)		AES	A	B	20	埋土	口縁外反、頸部以下縦笥削り
36	甕	20.3	(12.9)		AES	A	B	80	カマド右袖	口縁外反、頸部以下縦笥削り、黒斑
37	甕底部		(2.9)	7.1	AD2	A	B	25	埋土	小形平底、器内厚い
38	甕底部		(2.9)	5.0	E5	A	B	30	埋土	平底、底面木葉痕
39	甕底部		(3.6)	4.6	E5	A	B	50	埋土	平底、底面木葉痕
40	甕底部		(3.5)	4.7	AES	A	A	70	埋土	やや上げ底、底面木葉痕、黒斑
41	甕底部		(7.6)	6.2	DE5	B	B	80	貯蔵穴	平底、二次加熱
42	土製支脚	15.3		8.5	CE2	A	B	100	No34	円錐台形、中実
45	鈴形土製品				AC1	A	A	100	埋土	中空、内部に小石有り
44	土 鉢	長径(4.7)×最大径1.4×孔径0.5(cm)、重量8.9g								

第20号住居跡 (第37回)

本住居跡はK3L18グリッド付近に位置する。

旧河川跡により大部分が破壊され、かろうじて南西隅部分が残存した住居跡である。第19号住居跡によって切られる。

規模は現状で1.40×0.55m、深さ10cmを測る。長軸方向はN-10°-Wを測る。

平面形は方形乃至長方形と考えられ、規模は現状で5.20×2.00m、深さ40cmを測る。長軸方向はN-46°-Eを測る。壁は残存する部分は直立し、掘り込みはしっかりしている。壁溝は残存する壁下に、やや幅狭いものが設置される。柱穴は第19号住居跡P5に切られる小ピットが相当すると考えられる。

図示した変形土器3個体以外に、変形土器の胴部破片が5点、石製紡錘車が1点出土している。

第52号住居跡 (第37回)

本住居跡はK3K18グリッド付近に位置する。

大部分を第6、19号住居跡によって切られ、かろうじて西壁から北側面が残存した住居跡である。第51号住居跡との新旧関係は不明である。

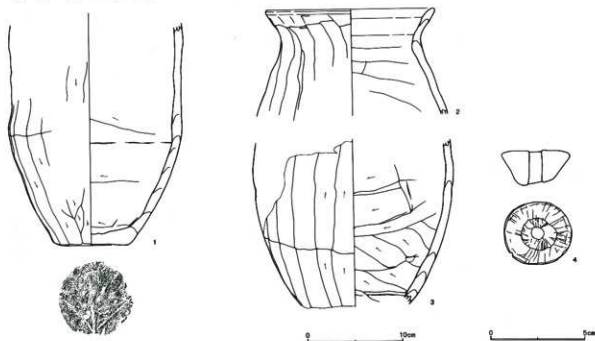
第52号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	甕		(24.5)	7.6	AES	A	A	60	No.1、床下	底部やや上げ底器内厚い、底面木葉痕
2	甕口縁部	18.0	(11.2)		AD5	A	E	25	No.2	口縁部肥厚、外面頸部以下縦笥削り
3	甕		(17.8)		AD5	A	B		No.3	外面縦笥削り
4	紡錘車	上径3.6×下径1.8×孔径0.7×厚さ1.8(cm)、重量25.8g								

第53号住居跡 (第37回)

本住居跡は第19号住居跡掘り方内部で検出された住居跡で、カマド燃焼部のみ残存したものである。規模は現状で0.45×0.30mを測る。

第40図 第52号住居跡出土土遺物



第29号住居跡 (第41、42図)

本住居跡はK3L17-18グリッド付近に位置する。

第3住居跡群の南端部にあり、本住居跡部分で第2、4住居跡群と境を接し、北、南側は遺構空白域が存在する。新旧関係は、本住居跡が第45号住居跡を切り、第17、19、20号住居跡によって切られる。

平面形は長方形で、規模は4.80×4.52m、深さ34cmを測る。主軸方位はN-94°-Wを測る。

床面は全体に硬質で、掘り方め戻し土上に構築され、ほぼ平坦である。貼り床は検出できなかった。掘り方は概ねカマドから貯蔵穴部分及び中央部を掘り残り、他の部分を掘り窪めるもので、西壁北半部は更に掘り込まれる。床面出土遺物は貯蔵穴付近、西側柱穴内側に比較的集中している。

壁は比較的遺存状態がよく、ほぼ直立し掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマド壁、西壁北側及び南西隅部分を除いて設置される。全体にやや幅狭く、掘り込みはしっかりしている。

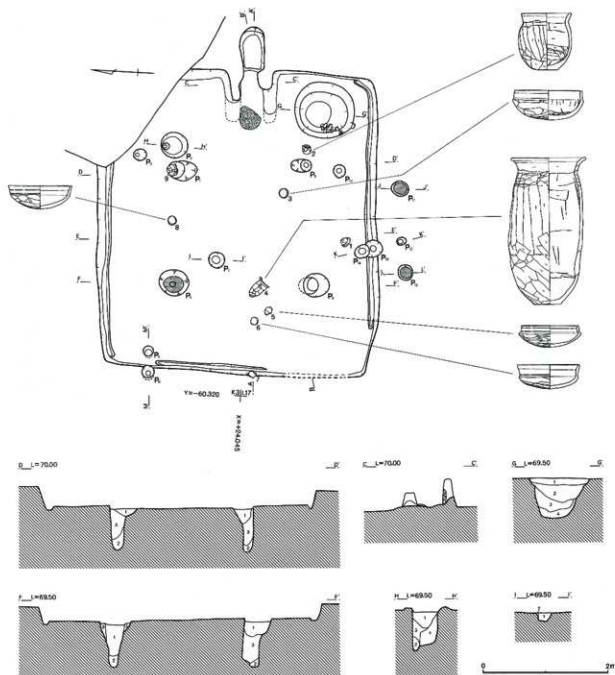
柱穴は11本と多数検出された。主柱穴はP1、P2、P4、P8、P9の5本である。いずれも深くP9以外は大形である。P3、P7、P10は小形で浅い。壁外のP6は

伴わない可能性があるが、P11-P15は埋土の様相から伴うと考えられる。主柱穴の法量はP1が径46×32cmの楕円形で深さ70cm、P2が径42cmで深さ62cm、P4が径46cmで深さ75cm、P8が径42cmで深さ80cm、P9が径32×18cmの楕円形で深さ74cmを測る。主柱穴配置はややカマド寄りに方形乃至台形状に配置され、柱穴間隔はP1P4が1.82m、P2P4が2.20m、P4P8が2.23m、P8P9が2.19m、P1P9が2.22m、P2P9が2.23mを測る。

貯蔵穴はカマド左側にあり、壁溝に接する。楕円形で2段に掘り込まれる。規模は上部が0.97×0.88m、下部が径0.77×0.64mで、深さ0.64mを測る。

カマドは西壁ほぼ中央部に設置され、遺存状態は良好である。燃焼部底面平坦で、焚き口にかけて良く焼けている。規模は0.87×0.38m、深さ0.32mを測る。燃焼部奥壁から段をなし煙道部へ移行する。煙道部は浅く先端部は第20号住居跡によって切られ、規模は0.58×0.38mを測る。袖部は一部地山を掘り残り、暗灰褐色粘土土を主体にして構築される。カマド壁両袖部分及び燃焼部奥壁は掘り込まれない。

第41図 第29号住居跡(1)



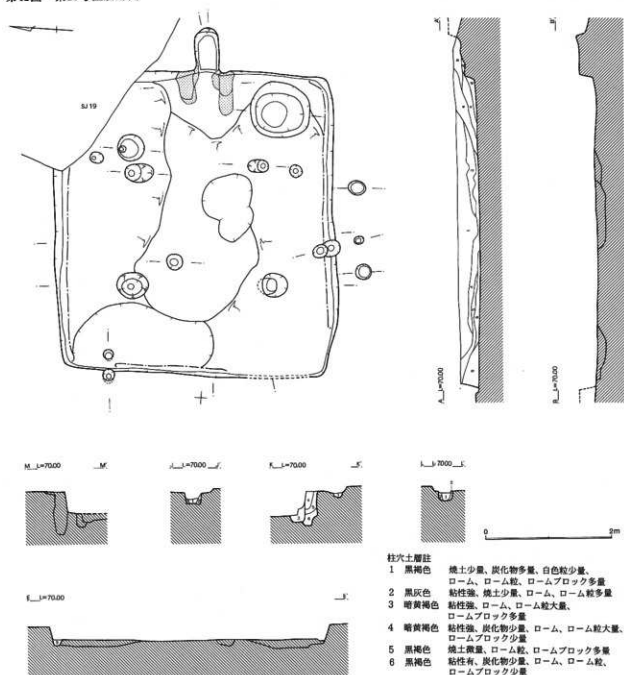
第29号住居跡土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、
パミス微量、円礫微量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 焼土ブロック微量、ロームブロック微量
- 3 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、炭化物微量、
パミス微量、円礫微量、ロームブロック多量
- 4 暗褐色砂質シルト 焼土ブロック少量、炭化物少量、ローム粒微量
- 5 黒褐色シルト 粘性有、炭化物微量、ロームブロック少量
- 6 暗褐色シルト 粘性強、焼土ブロック微量、
ロームブロック多量
- a 暗褐色砂質シルト 粘性有、焼土ブロック少量、
炭化物微量、ロームブロック微量
- b 黒褐色砂質シルト 粘性有、焼土粒、焼土ブロック多量
- c 黒褐色シルト 焼土粒、焼土ブロック多量、
ロームブロック少量

貯蔵穴土層註

- 1 暗褐色 焼土、焼土ブロック少量、ローム、
ローム粒多量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色 焼土、焼土ブロック多量、炭化物少量、
ローム、ローム粒少量、ロームブロック少量
- 3 暗褐色 焼土少量、炭化物少量、ローム、
ローム粒少量、ロームブロック少量
- 4 暗灰褐色 粘性強、炭化物少量、白色粒少量、
ローム、ローム粒少量

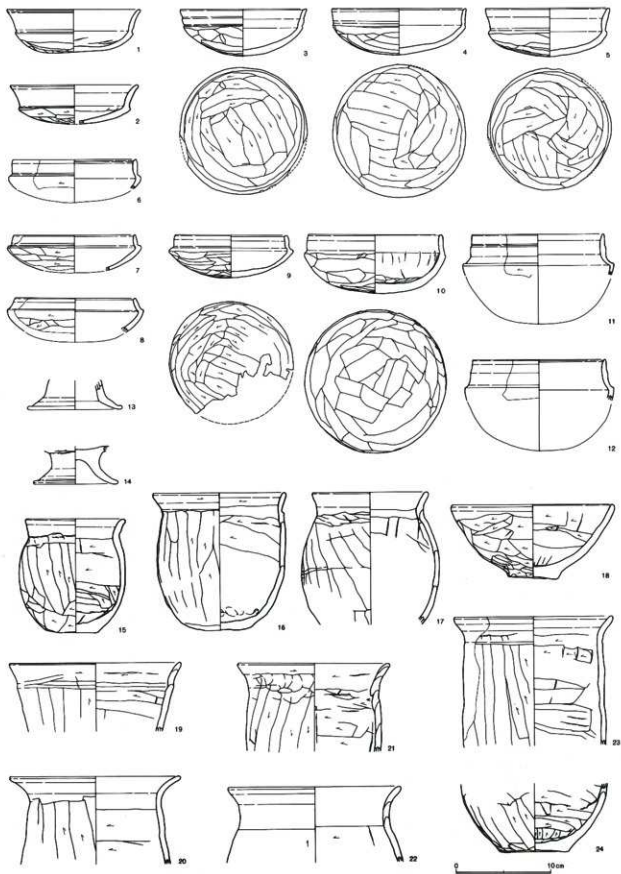
第42図 第29号住居跡(2)



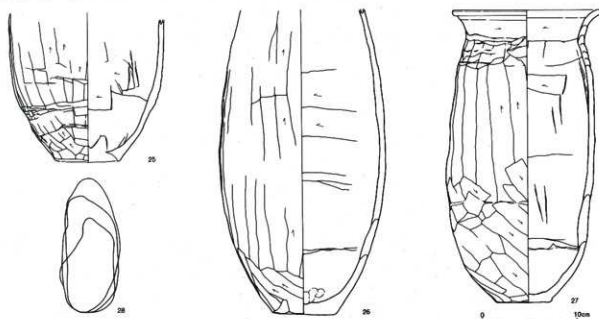
第29号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	13.9	4.6		D1	A	B	60	貯藏穴	砂質、稜部は工具ナデ+筥削り
2	環	13.4	(4.1)		AD1	A	B	25	埋土	稜部はヨコナデ、棒状工具+筥削り
3	環	13.4	4.9		AC2	A	B	90	No.8	稜部は工具ナデ、稜部工具ナデ+筥削り
4	環	14.1	4.9		AC2	A	B	90	埋土	二次加熱?稜部はヨコナデ+筥削り
5	環	13.0	4.9		A2	A	C	90	No.6	稜部はヨコナデ、稜部はヨコナデ+筥削り
6	環	13.1	(3.2)		A2	A	E	10	埋土	稜部はヨコナデ+筥削り
7	環	12.8	(4.0)		AC1	A	F	20	埋土	稜部はヨコナデ、棒状工具+筥削り
8	環	12.5	(3.6)		AC1	A	A	20	埋土	稜部はヨコナデ+筥削り

第43图 第29号住居跡出土物(1)



第44図 第29号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
9	環	11.9	4.5		A1	A	A	80	Na 5	稜部はヨコナデ+寛削り
10	環	14.4	6.1		A5	A	B	100	Na 3	稜部はヨコナデ+寛削り
11	環	13.9	(4.3)		AD1	A	A	10	埋土	稜部ヨコナデ+寛削り、段部棒状工具
12	環	14.1	(4.3)		A1	A	C	10	貯蔵穴	砂質、稜部ヨコナデ+寛削り
13	高環脚部		(3.1)	9.9	AD1	A	B	50	埋土	砂質、内面寛削り
14	高環脚部		(4.0)	9.0	A1	A	B	80	埋土	砂質、摩滅顕著
15	小形甕	10.4	12.0	5.3	A2	A	A	90	Na 2	口縁部小さく外反、外面縦寛削り
16	小形甕	14.0	14.5	6.5	AC2	A	B	90	埋土	頸部僅かに屈曲、外面縦寛削り
17	小形甕	12.1	(14.5)		AC2	A	B	30	貯蔵穴	口縁部内面後をなす、頸部指頭ナデ
18	鉢	16.9	7.7	5.3	AE5	A	A	40	埋土	底面木葉痕
19	鉢	18.0	(7.3)		D2	A	B	20	埋土	口縁外反、内面段をなす、縦寛削り
20	甕	18.0	(9.5)		A2	A	B	10	埋土	口縁部外反、縦寛削り
21	甕	15.8	(9.3)		AE5	A	E	10	Na 7	口縁外反、頸部指頭ナデ、縦寛削り
22	甕	18.0	(8.0)		AD2	A	C	20	貯蔵穴	口縁外反、外面段をなす、縦寛削り
23	甕	16.8	(13.7)		AD2	A	B	20	埋土	口縁外反、頸部僅かに屈曲、外面縦寛削り
24	甕底部		(7.3)	7.3	A2	A	B	30	埋土	底部厚くやや上げ底、木葉痕残る
25	甕胴部		(14.9)	7.1	A1	A	B	60	貯蔵穴	砂質、接合痕、外面寛削り
26	甕胴部		(32.2)	6.7	AD2	A	B	70	貯蔵穴、床下	胴部僅かに膨らむ、外面黒斑、縦寛削り
27	甕	15.5	30.9	6.1	A5	A	B	90	埋土	胴部僅かに膨らむ、輪積み痕、外面黒斑

第51号住居跡 (第45図)

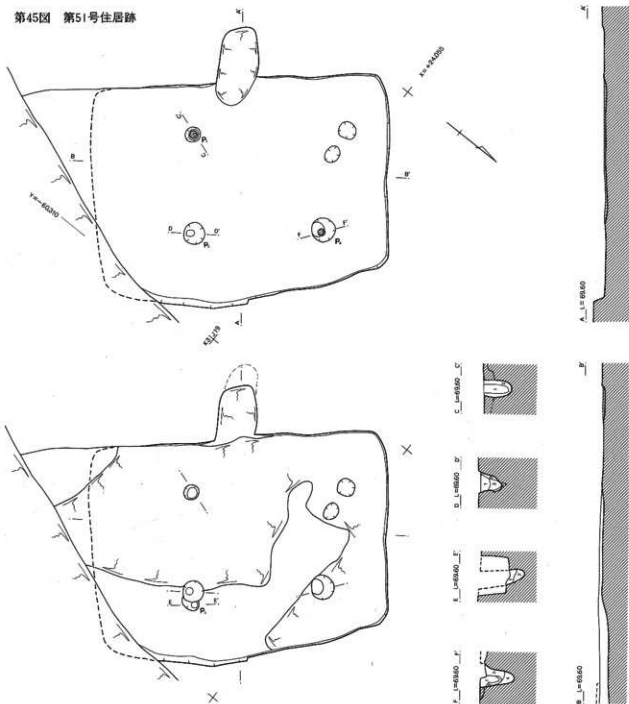
本住居跡は K3J18~19 グリッド付近に位置する。

第2住居跡群の北東端部にあり、東側の旧河川跡によって大きく攪乱を受ける。新旧関係は、本住居跡が第6、12号住居跡によって切られ、第52号住居跡との関係は不明である。重複顕著でほとんど掘り方に達していると考えられる。

平面形は、東壁が旧河川跡の攪乱により残存しないが、北東壁が湾曲する略長方形で、規模は現状で 4.80×3.68m、掘り込みは浅く 5cm を測る。主軸方位は N-121°-W を測る。

床面は全体に柔らかくほぼ平坦で、掘り方埋め戻し土上に構築される。掘り方は北東隅から概ね中央部付近を掘り残し、他の部分を浅く掘り溜めるものである。

第45図 第51号住居跡



第51号住居跡 柱穴土層註

- 1 黒色 粘土多量、ローム、ローム較多量
- 2 黒色 ローム、ローム較多量
- 3 黒色 ローム、ローム較多量、ロームブロック多量
- 4 黒褐色 粘性強、焼土、炭化物微量

貼り床は存在しない。

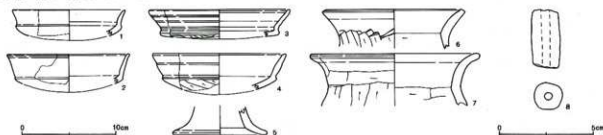
壁はやや傾斜するが、遺存状態は極く悪い。壁溝は認められなかった。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴は明確なものは3本で、西南部の相当する部分には小ビットが2本検出されている。P1が径24cmで深さ45cm、P2が径36cmで深さ45cm、P3が径30cmで深

さ76cmを測る。P1、P3は柱痕跡が検出された。掘り方内からP2に切られるビットが検出された。柱穴配置は西側にずれた方形である。柱穴間隔はP1P2が1.57m、P2P4が2.06m、P3P4が2.02mを測る。

カマドは南西壁ほぼ中央部に設置され、かろうじて燃焼部焼土が存在していた。

第46図 第51号住居跡出土遺物



第51号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(12.0)	(3.2)		A1	A	C	10	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナデ+寛削り
2	坏	(13.0)	(3.8)		D1	A	A	10	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
3	坏	15.0	(3.2)		AC1	A	A	20	埋土	口唇凹む段部工具ナテ稜部ヨコナデ+寛削り
4	坏	(14.0)	(3.8)		AD1	A	A	10	埋土	段部棒状工具、稜部ヨコナデ+寛削り
5	高坏脚部		(3.1)	(10.0)	A1	A	C	10	埋土	砂質、器肉厚い、内面寛削り
6	甃	15.0	(4.2)		D2	A	B	10	埋土	口唇平坦、口縁部肥厚
7	甃	17.8	(5.6)		AE5	A	E	20	埋土	口唇肥厚、頸部以下斜削り
8	土 鏝	長径(3.0)×最大径1.45×孔径0.4(cm)、重量6.3g								

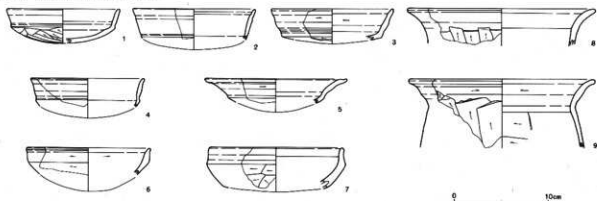
4. 第4住居跡群

第38号跡

本跡は第26号住居跡カマド北側で、同住居跡を切る焼土を含む不整形の黒色土の範囲として確認された。

精査の結果、住居跡ではないと判断されたが比較的遺物が出土しており、掲載(第47図)しておく。

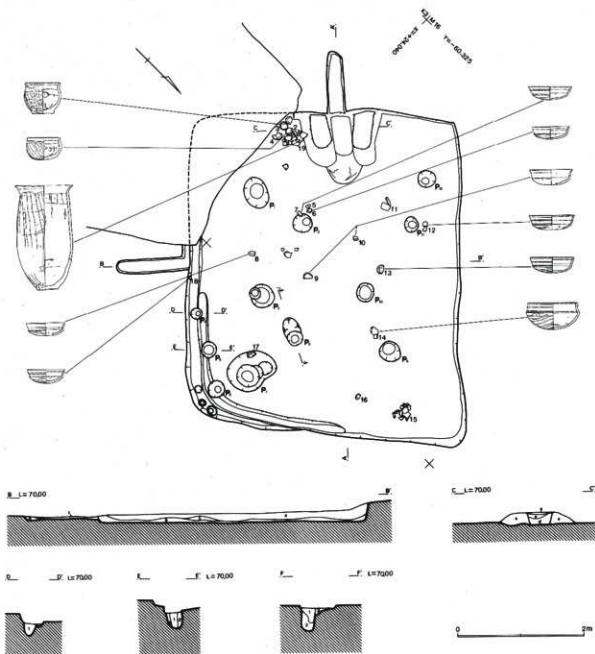
第47図 第38号住居跡出土遺物



第38号跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	12.0	3.6		AC1	B	B	30	カマド	稜部はヨコナデ、棒状工具+寛削り
2	坏	(12.9)	(3.3)		AC1	A	B	10	カマド	段部棒状工具、稜部棒状工具ナテ+寛削り
3	坏	(12.8)	(3.3)		C1	B	F	10	埋土	段部工具ナテ稜部は工具ナテ+寛削り
4	坏	(12.0)	(2.9)		A1	B	C	20	カマド	摩滅顯著、稜部はヨコナデ+寛削り
5	坏	(15.0)	(2.5)		AC1	A	A	10	カマド	段部ヨコナデ、稜部はヨコナデ+寛削り
6	坏	(13.1)	(2.8)		A1	A	C	20	埋土	口縁部肥厚、稜部はヨコナデ+寛削り
7	坏	(13.9)	(4.3)		A1	B	A	10	カマド	器肉厚い、稜部はヨコナデ+寛削り
8	甃口縁部	(19.5)	(4.0)		AE2	B	B	20	カマド	口縁外反、頸部以下縦削り
9	甃口縁部	(19.3)	(7.3)		E5	B	A	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦削り

第48図 第17号住居跡(1)



第17号住居跡土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、パミス多量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色シルト 粘性強、焼土ブロック微量、パミス少量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色シルト 粘性強、焼土粒、焼土ブロック多量、炭化物少量、パミス少量、ロームブロック少量
- 4 黒色シルト 粘性強、焼土微量、炭化物多量、パミス少量
- 5 黒褐色シルト 粘性有、焼土粒少量、焼土ブロック微量、パミス少量、ロームブロック少量
- 6 灰黄褐色シルト 粘性強、焼土ブロック少量、炭化物多量、ロームブロック少量
- 7 黒褐色シルト 粘性強、焼土粒微量、ロームブロック少量

第17号住居跡柱穴土層註

- 1 暗褐色シルト 粘性強、焼土ブロック、パミス少量、ロームブロック多量
- 2 暗褐色シルト 粘性強、焼土微量、ローム粒、ロームブロック微量
- 3 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック、炭化物少量
- a 褐色細粒砂 粘性有、焼土ブロック少量、炭化物微量、パミス
- b 褐色細粒砂 粘性有、焼土粒、焼土ブロック多量、炭化物微量、ロームブロック少量
- c 灰褐色シルト 有機質、粘性強、焼土粒、焼土ブロック多量、炭化物、ロームブロック少量
- d 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック少量、炭化物少量、ロームブロック少量
- e 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、炭化物微量、パミス微量、ロームブロック微量

第17号住居跡 (第47、48図)

現水田床土直下で、第22号住居跡カマドを切る、周辺部では比較的新しい段階の住居跡として検出されたが、南壁以外は不詳で平面形の全容は掴めなかった。北壁部分は現水田に伴う溝による攪乱を受ける。

埋土は黒褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。埋土中から比較的多量の土器が出土しているが、分布の中心は住居跡北側にある。

新旧関係は、第8、22、23、29、30、45号住居跡を切り、第7号住居跡によって南隅部分を切られる。

平面形は東西方向に主軸を持ち、カマド対壁が斜行

する略長方形で、5.36×4.52mを測る。主軸方位はN-44.5°-Wである。

床は全体に硬質で、西側にやや傾斜する。東南部分には地山を床面としている。住居跡の重複にもかかわらず、貼り床は存在しない。

主柱穴は4本(P1、P7、P9、P12)で、北隅部(P9)1本がやや内側にずれた配置をなす。いずれも深さ0.7~0.8mで深い。さらに中軸線から東側にややずれた位置に2本、P3、P10が存在する。

各柱穴間隔はP1P7が2.95m、P7P9が2.31m、P9P12が2.62m、P1P12が2.72m、P3P10が1.80m

第49図 第17号住居跡(2)・第22号住居跡



第50図 第22号住居跡出土遺物



第22住居跡出土遺物註
a 暗褐色 焼土、炭化物少量
b 赤褐色 焼土、炭化物少量



第51图 第17号住居跡出土遺物(1)

